# 第１８章

# マハーラージャ・パリークシット、ブラーフマナの少年に呪われる

### 第１節

*सूत उवाच*
यो वै द्रौण्यस्त्रविप्लुष्टो न मातुरुदरे मृतः ।
अनुग्रहाद् भगवतः कृष्णस्याद्भुतकर्मणः ॥ १ ॥

*sūta uvāca*
*yo vai drauṇy-astra-vipluṣṭo*
*na mātur udare mṛtaḥ*
*anugrahād bhagavataḥ*
*kṛṣṇasyādbhuta-karmaṇaḥ*

*sūtaḥ uvāca*—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *yaḥ*—〜である者; *vai*—確かに; *drauṇi-astra*—ドローナの息子の武器によって; *vipluṣṭaḥ*—〜に焼かれて; *na*—決して〜ない; *mātuḥ*—母親の; *udare*—子宮の中で; *mṛtaḥ*—死に出会った; *anugrahāt*—慈悲によって; *bhagavataḥ*—人格主神の; *kṛṣṇasya*—クリシュナ; *adbhuta-karmaṇaḥ*—素晴らしく行動する者。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「すばらしい活動をする人格主神・シュリー・クリシュナの慈悲に守られたマハーラージャ・パリークシットは、母親の胎内でドローナの息子の武器に襲われても、焼かれることはなかった」

### 要旨解説

ナイミシャーラニャの聖者たちは、マハーラージャ・パリークシットについて、とくにカリの権化を処罰することでカリが国内でなにも害を及ぼせなくなったことについて聞いたあと、驚異の念に打たれました。スータ・ゴースヴァーミーは、マハーラージャ・パリークシットの誕生と死のどちらについても説明したいと思っており、ナイミシャーラニャの聖者たちの関心

を高めるためにこの節から話を始めました。

### 第２節

ब्रह्मकोपोत्थिताद् यस्तु तक्षकात्प्राणविप्लवात् ।
न सम्मुमोहोरुभयाद् भगवत्यर्पिताशयः ॥ २ ॥

*brahma-kopotthitād yas tu*
*takṣakāt prāṇa-viplavāt*
*na sammumohorubhayād*
*bhagavaty arpitāśayaḥ*

*brahma-kopa*—ブラーフマナの激怒; *utthitāt*—〜で起こされた; *yaḥ*—〜だったもの; *tu*—しかし; *takṣakāt*—スネークバードによって; *prāṇa-viplavāt*—命を失うことから; *na*—決して〜ない; *sammumoha*—圧倒された; *uru-bhayāt*—大きな恐れ; *bhagavati*—人格主神に; *arpita*—服従して; *āśayaḥ*—意識。

さらに、人格主神に身をゆだねることをいつも心がけていたため、ブラーフマナの少年の憤怒ゆえに自分を噛み殺しに来るスネークバードを恐れることも、そしてそのことに乱されることもなかった。

### 要旨解説

みずからをゆだねた主の献愛者をナーラーヤナ・パラーヤナ（*nārāyaṇa-parāyaṇa*）と言います。そのような人は、どのような場所も人も、いいえ、死さえも恐れません。かれにとってなんであろうと至高主ほど大切なものはなく、そのため、天国も地獄も同じ価値として見つめます。どちらも主の創造界であることを、また、生も死も主によって作られた異なる状況であることを知っているのです。しかし、どのような条件や状況にあっても、ナーラーヤナを思いだすことは欠かせません。ナーラーヤナ・パラーヤナは、いつもそのように修練しています。マハーラージャ・パリークシットはそのような純粋な献愛者でした。カリの影響を受けていた未熟なブラーフマナのために誤って呪われても、それさえナーラーヤナから送られたもの、と受けとめました。母親の胎内で焼かれるところをナーラーヤナ（主クリシュナ）に救われたことを覚えていましたし、たとえ蛇に噛まれて死のうとも、それも主の意志ゆえに起こるという事実を知っていました。献愛者は、ぜったいに主の意志にはさからいません。神が送ったもの

はなんでも献愛者には祝福なのです。だからこそマハーラージャ・パリークシットはそのようなことに恐れも惑わされもしませんでした。それが主の純粋な献愛者の証しです。

### 第３節

उत्सृज्य सर्वतः सङ्गं विज्ञाताजितसंस्थितिः ।
वैयासकेर्जहौ शिष्यो गङ्गायां स्वं कलेवरम् ॥ ३ ॥

*utsṛjya sarvataḥ saṅgaṁ*
*vijñātājita-saṁsthitiḥ*
*vaiyāsaker jahau śiṣyo*
*gaṅgāyāṁ svaṁ kalevaram*

*utsṛjya*—捨てたあと; *sarvataḥ*—あたりに; *saṅgam*—交流; *vijñāta*—理解して; *ajita*—決して征服されない者（人格主神）; *saṁsthitiḥ*—実際の立場; *vaiyāsakeḥ*—ヴャーサの息子へ; *jahau*—捨て去った; *śiṣyaḥ*—弟子として; *gaṅgāyām*—ガンジス川のほとりで; *svam*—彼自身; *kalevaram*—物質の体。

さらに王は、自分にかかわるすべての人々から離れたあと、ヴャーサの子（シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー）の弟子としてみずからをゆだね、やがて人格主神の真実の立場を理解することができたのである。

### 要旨解説

この節にあるアジタ（*ajita*）は重要です。人格主神、シュリー・クリシュナはアジタ、すなわち征服されない者と呼ばれており、ほんとうに主はあらゆる面でそのとおりの方です。だれも主のほんとうの立場を知りません。主は、知識を使っても征服することができません。私たちは主のダーマ（*dhāma*）・住居であるゴーローカ・ヴリンダーヴァナについて話を聞いていますが、この場所についてさまざまな解釈をする学者がたくさんいます。しかし、パリークシット王がもっとも謙虚な弟子として身をゆだねた相手であるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような精神指導者の恩寵によって、主のほんとうの立場、主の永遠のダーマ・住居、そのダーマにある崇高なすべての出来事や物事を知ることができます。王は、主の超越的な境地について、そしてその超越的なダーマに近づくことのできる超越的な方法を知っていたからこそ、自分の窮極目的地を確信し、またそう理解することで、自分の体さえ含む物質的なものすべて

を、執着という困難さえ感じることなく捨てることができました。『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第59節）では*paraṁ dṛṣṭvā nivartate*（パランム　ドゥリシュトゥヴァー　ニヴァルタテー）と言われています。パランム（*param*）、すなわち優性エネルギーを見ることができる人は、物質的執着に関係のあるものすべてを捨てることができます。私たちは『バガヴァッド・ギーター』をとおして物質のエネルギーを超えた主のエネルギーを理解することができますし、主が優性エネルギーをとおして自分の永遠な名前・質・娯楽・品々・多様性を表わしているそのエネルギーを、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような本物の精神指導者の恩寵を授かって理解することができます。主のこの優性の、そして永遠のエネルギーを完全に知らなければ、絶対真理の真実について、推論に頼った理論を駆使しても物質エネルギーから離れることはできません。マハーラージャ・パリークシットは、主クリシュナの恩寵があったからこそ、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような人物の慈悲を授かったのであり、そのおかげで、征服されない主のほんとうの立場を知ることができました。ヴェーダ経典を学んで主を見つけだすのは至難の業ですが、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような解放された献愛者の慈悲さえあれば、主を理解するのはたやすいことです。

**第４節**

नोत्तमश्लोकवार्तानां जुषतां तत्कथामृतम् ।
स्यात्सम्भ्रमोऽन्तकालेऽपि स्मरतां तत्पदाम्बुजम् ॥ ४ ॥

*nottamaśloka-vārtānāṁ*
*juṣatāṁ tat-kathāmṛtam*
*syāt sambhramo 'nta-kāle 'pi*
*smaratāṁ tat-padāmbujam*

*na*—決して～ない; *uttama-śloka*—ヴェーダ聖歌が讃えている人格主神; *vārtānām*—そのことのために生きる者達の; *juṣatām*—そのことに従事する者達の; *tat*—主の; *kathā-amṛtam*—主に関する超越的な話題; *syāt*—そのように起こる; *sambhramaḥ*—誤解; *anta*—最期に; *kāle*—やがて; *api*—もまた; *smaratām*—思いだしている; *tat*—主の; *pada-ambujam*—蓮華の御足。

これは事実である。なぜなら、みずからの生涯を、ヴェーダ聖歌が謳う人格主神にまつわる崇高な話題に耳をかたむけることに捧げ、主の蓮華の御足をいつも思う者は、生涯最期の瞬間にでさえ、誤解を持つ危険を冒さないからである。

### 要旨解説

人生の最高完成は、生涯を閉じる瞬間に主の超越的な特質を思いだすことで達成できます。この人生の完成は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような解放された魂、あるいはその師弟継承にいる人物たちによって謳われたヴェーダ聖歌をとおして主の真の超越的質を学んだ人が達成できます。頭だけで考える推論家からヴェーダ聖歌を聞いても、なにも得られません。同じことを、ほんとうに自己を悟った魂から聞き、奉仕と従順な心でその内容を正しく理解すれば、すべては透明の水のように明らかになります。こうして従順な弟子は崇高な生活を送り、その生き方を人生最期まで貫くことができます。この科学的な方法に従えば、肉体機能の混乱ゆえに記憶が弱まる人生最期の瞬間にでさえ主を思いだすことができます。ふつうの人には、死ぬときになにかを思いだすことは難しいものですが、主、真実の献愛者、そして精神指導者の恩寵さえあれば、苦もなくその機会を自分のものにできます。そして、それがマハーラージャ・パリークシットによって実現されたのです。

### 第５節

तावत्कलिर्न प्रभवेत् प्रविष्टोऽपीह सर्वतः ।
यावदीशो महानुर्व्यामाभिमन्यव एकराट् ॥ ५ ॥

*tāvat kalir na prabhavet*
*praviṣṭo 'pīha sarvataḥ*
*yāvad īśo mahān urvyām*
*ābhimanyava eka-rāṭ*

*tāvat*—〜である限り; *kaliḥ*—カリの権化; *na*—〜できない; *prabhavet*—繁栄する; *praviṣṭaḥ*—〜に入る; *api*—〜ではあるが; *iha*—ここに; *sarvataḥ*—どこにも; *yāvat*—〜である限り; *īśaḥ*—君主; *mahān*—偉大な; *urvyām*—力強い; *ābhimanyavaḥ*—アビマンニュの子息; *eka-rāṭ*—その皇帝。

その偉大で力強いアビマンニュの子息が世界の皇帝として君臨するかぎり、カリの権化が世にはびこる可能性はない。

### 要旨解説

すでに説明したように、カリの権化はすでに地球に入りこみ、自分の影響力を全世界に広げ

ることを虎視眈々と狙っていました。しかし、マハーラージャ・パリークシットの存在ゆえに、本望が遂げられませんでした。それが優れた政府のあり方です。カリの権化のような混乱を作りだす輩は、いつでも邪悪な活動を横行させようとしていますが、有能な国家の義務は、手を尽くしてそのような勢いを食い止めることにあります。マハーラージャ・パリークシットはカリの権化に場所を与えはしましたが、同時に、市民がカリに動じる機会も与えませんでした。

### 第６節

यस्मिन्नहनि यर्ह्येव भगवानुत्ससर्ज गाम् ।
तदैवेहानुवृत्तोऽसावधर्मप्रभवः कलिः ॥ ६ ॥

*yasminn ahani yarhy eva*
*bhagavān utsasarja gām*
*tadaivehānuvṛtto 'sāv*
*adharma-prabhavaḥ kaliḥ*

*yasmin*—それについて; *ahani*—その日; *yarhi eva*—その瞬間に; *bhagavān*—人格主神; *utsasarja*—去っていった; *gām*—地球; *tadā*—その時; *eva*—確かに; *iha*—この世界で; *anuvṛttaḥ*—従った; *asau*—彼; *adharma*—無宗教; *prabhavaḥ*—加速している; *kaliḥ*—争いの権化。

人格主神、主シュリー・クリシュナが地球から去っていったその日から、ありとあらゆる無宗教的活動をはびこらせるカリの権化がこの世界に入りこんだ。

### 要旨解説

人格主神、そして主の聖なる名前や質などはすべて同じです。カリの権化は、人格主神がいたために地球に降りたつことができませんでした。同じように、最高人格主神の聖なる名前や質などをいつも唱えるという配慮が準備されているため、カリの権化が入る余地はまったくありません。それが、世界からカリの権化を追い払うテクニックです。現代社会では物質科学が大きな発展を遂げ、音を空間に拡散させるラジオが発明されました。ですから、感覚を楽しませるだけの不快な音を響かせるかわりに、『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』が認めているように、主の聖なる名前、名声、活動にまつわる超越的な音を広める配慮をすれば、有利な環境が作られ、世界中に宗教原則がよみがえります。その結果、世界の退廃を防ごうと躍起になっている国の代表者たちの願いも叶います。主の奉仕に使いさえすれば、悪いものはなにもありません。

## 第７節

नानुद्वेष्टि कलिं सम्राट् सार॒ इव सारभुक् ।
कुशलान्याशु सिद्ध्यन्ति नेतराणि कृतानि यत् ॥ ७ ॥

*nānudveṣṭi kaliṁ samrāṭ*
*sāraṅga iva sāra-bhuk*
*kuśalāny āśu siddhyanti*
*netarāṇi kṛtāni yat*

*na*—決して～ない; *anudveṣṭi*—嫌悪心; *kalim*—カリの権化に; *samrāṭ*—皇帝; *sāram-ga*—現実主義者、ミツバチのように; *iva*—～のように; *sāra-bhuk*—真意を受けいれる者; *kuśalāni*—吉兆な対象; *āśu*—すぐに; *siddhyanti*—成功する; *na*—決して～ない; *itarāṇi*—不吉な物事; *kṛtāni*—実行されて; *yat*—～と同じほど。

マハーラージャ・パリークシットは（花の）エキスだけを吸いとるミツバチのような現実主義者である。そしてカリ時代では、吉兆な物事はすぐにすばらしい結果を作りだすが、不吉な行動はじっさいに行なわれてはじめて結果が作りだされることをよく知っている。だからかれは、決してカリの権化を嫌っていたわけではなかったのである。

### 要旨解説

カリ時代は堕落の時代、と言われています。この堕落した時代にいる生命体は苦しんでいるため、至高主はかれらのために便宜を図っています。おかげで生命体は、主の意志で、じっさいに行動しなければその行ないの犠牲にはなりません。それまでの時代では、罪なことを考えるだけでその行動の犠牲になっていました。逆に、現代に生きる生命体は、敬虔な行ないを頭に描くだけでその行為の結果を授かることができます。マハーラージャ・パリークシットは、主の恩寵を授かっているためひじょうに博識で経験豊富で、たんにカリの権化を嫌悪していたわけではありません。罪なことをする機会をかれに与えるつもりはなかったからです。臣民たちがカリ時代の罪な行ないの犠牲にならないよう守っていましたし、同時に、カリ時代にも特定の場所を与えることで、充分に便宜を図ってあげました。『シュリーマド・バーガヴァタム』の終わりには、たとえカリ時代の非道な行ないがあっても、カリ時代にはすばらしい特典が用意されている、と述べられています。ただ、主の聖なる名前を唱えるだけで解放されるのです。こうしてマハーラージャ・パリークシットは、主の聖なる名前を組織的に広める努力をし、市

民をカリの支配から救いました。偉大な聖者たちがときにカリ時代のために幸運を願うのは、この恩恵を授かるためなのです。ヴェーダにも、主クリシュナの活動について話しあえばカリ時代にある不遇を取りのぞくことができる、と述べられています。『シュリーマド・バーガヴァタム』のはじめには、『シュリーマド・バーガヴァタム』を吟唱することで、至高主はすぐに私たちの心のなかに囚われる、と言われています。これらが、カリ時代にあるすばらしい利点であり、マハーラージャ・パリークシットはこの利点をすべて受けいれ、ヴァイシュナヴァ文化への信念を持ちつづけ、カリ時代の不運を気にすることはありませんでした。

**第８節**

किं नु बालेषु शूरेण कलिना धीरभीरुणा ।
अप्रमत्तः प्रमत्तेषु यो वृको नृषु वर्तते ॥ ८ ॥

*kiṁ nu bāleṣu śūreṇa*
*kalinā dhīra-bhīruṇā*
*apramattaḥ pramatteṣu*
*yo vṛko nṛṣu vartate*

*kim*—〜であるもの; *nu*—〜かもしれない; *bāleṣu*—知性に欠ける者達の間で; *śūreṇa*—力強い者によって; *kalinā*—カリの権化によって; *dhīra*—自己抑制; *bhīruṇā*—〜を恐れる者によって; *apramattaḥ*—注意深い者; *pramatteṣu*—不注意な者達の間で; *yaḥ*—〜である者; *vṛkaḥ*—虎; *nṛṣu*—人間の間で; *vartate*—存在する。

マハーラージャ・パリークシットは、知性のない者たちはカリの権化をひじょうに力のある存在だと思うかもしれないが、自己を抑制する者たちは恐れない、と考えていた。パリークシット王は虎のように強く、そして愚か者や軽率な者たちを気づかっていたのである。

**要旨解説**

主の献愛者でない人々は軽率で知性がありません。真に知的でなければ主の献愛者になることはできないのです。主の献愛者でなければ、カリの動きの餌食になります。マハーラージャ・パリークシットが従った行動様式、すなわち一般人に主の献愛奉仕を広める想いがなければ、社会に健全な環境を作ることはできません。

## 第９節

उपवर्णितमेतद्वः पुण्यं पारीक्षितं मया ।
वासुदेवकथोपेतमाख्यानं यदपृच्छत ॥ ९ ॥

*upavarṇitam etad vaḥ*
*puṇyaṁ pārīkṣitaṁ mayā*
*vāsudeva-kathopetam*
*ākhyānaṁ yad apṛcchata*

*upavarṇitam*—ほとんどすべてを語って; *etat*—これらすべて; *vaḥ*—あなた達に; *puṇyam*—敬虔な; *pārīkṣitam*—マハーラージャ・パリークシットについて; *mayā*—私によって; *vāsudeva*—主クリシュナの; *kathā*—話; *upetam*—〜と関連して; *ākhyānam*—statements; *yat*—what; *apṛcchata*—you asked from me.

聖者たちよ。私は皆さんの問いに答えて、敬虔なマハーラージャ・パリークシットの生涯と関連した主クリシュナの話についてほぼすべてを語った。

### 要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』は主の活動を伝える歴史書です。そして主の活動は主の献愛者たちと関連して行なわれています。ですから、献愛者の話は主クリシュナの活動となんら変わることがありません。主の献愛者は、主の活動と純粋な献愛者の活動を等しく捉えます。どちらもすべて超越的だからです。

## 第１０節

या याः कथा भगवतः कथनीयोरुकर्मणः ।
गुणकर्माश्रयाः पुम्भिः संसेव्यास्ता बुभूषुभिः ॥ १० ॥

*yā yāḥ kathā bhagavataḥ*
*kathanīyoru-karmaṇaḥ*
*guṇa-karmāśrayāḥ pumbhiḥ*
*saṁsevyās tā bubhūṣubhiḥ*

*yāḥ*—なんでも; *yāḥ*—そしてなんであろうと; *kathāḥ*—話題; *bhagavataḥ*—人格主神について; *kathanīya*—私によって語られるべきものだった; *uru-karmaṇaḥ*—素晴らしく行動する主の; *guṇa*—超越的な質; *karma*—非凡な活動; *āśrayāḥ*—伴っている; *pumbhiḥ*—人々によって; *saṁsevyāḥ*—聞かれるべきもの; *tāḥ*—それらのすべて; *bubhūṣubhiḥ*—自分達の幸福を願う者達によって。

人生を完璧にまっとうしたいと願うのであれば、すばらしい活動をする人格主神の超越的な活動と特質にまつわる話題すべてについて、すなおな気持ちで聞かなくてはならない。

**要旨解説**

主シュリー・クリシュナの超越的活動、質、名前を系統的に聞くことが、私たちを永遠の生活に推し進めてくれます。「系統的に聞く」とは、主について徐々に正しくありのままに知るということであり、「主を正しくありのままに知る」とは、『バガヴァッド・ギーター』が述べるように、永遠の生活に到達することを指しています。主シュリー・クリシュナのそのような超越的かつ栄光あふれる活動は、条件づけられた生命体への物質的報酬と考えられる生老病死の過程を止める治療法です。そのような完成された生活をきわめることが人間生活のゴールであり、超越的な喜びを達成したことでもあります。

**第１１節**

ऋषय ऊचुः
सूत जीव समाः सौम्य शाश्वतीर्विशदं यशः ।
यस्त्वं शंससि कृष्णस्य मर्त्यानाममृतं हि नः ॥ ११ ॥

*ṛṣaya ūcuḥ*
*sūta jīva samāḥ saumya*
*śāśvatīr viśadaṁ yaśaḥ*
*yas tvaṁ śaṁsasi kṛṣṇasya*
*martyānām amṛtaṁ hi naḥ*

*ṛṣayaḥ ūcuḥ*—徳高き聖者達が言った; *sūta*—スータ・ゴースヴァーミーよ; *jīva*—私達はあなたの〜の命を望む; *samāḥ*—長い年月; *saumya*—厳粛な; *śāśvatīḥ*—永遠の; *viśadam*—特に; *yaśaḥ*—名声において; *yaḥ tvam*—なぜならあなたは; *śaṁsasi*—巧みに語っている; *kṛṣṇasya*—主シュリ

ー・クリシュナの; *martyānām*—死ぬ者達の; *amṛtam*—命の永遠性; *hi*—確かに; *naḥ*—私達の。

徳高き聖者たちが言った。「威厳あふれるスータ・ゴースヴァーミーよ！　あなたが長寿ととわの名声に恵まれますように。主クリシュナ・人格主神の活動を巧みに語る方だからです。これは、私たちのような限りある命を持つ者にとっては甘露とも言えましょう」

**要旨解説**

人格主神の超越的な質と活動を聞けば、主がみずから『バガヴァッド・ギーター』（第４章・第９節）で語ったことをいつも思いだすことができます。主の活動は、物質エネルギーと区別される主の精神エネルギーによって強められるため、たとえ人間社会でなされるものであっても超越的です。『バガヴァッド・ギーター』が言うように、そのような活動を*divyam*（ディヴャンム）と言います。言いかえれば主の活動は、物質エネルギーに縛られているふつうの生命体のような活動や誕生ではない、ということです。また主の体は、一般の生命体のように物質的でも変化するものでもありません。そしてこの真理を主から直接、あるいは権威ある情報源をとおして理解する人は、物質の体を去っていったあとふたたび生まれることはありません。啓発されたそのような魂は主の精神界に入ることを許され、主に超越的な愛情奉仕をすることができます。ですから、『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』で言われているように、主の超越的な活動を聞けば聞くほど主の超越的な質をさらに深く知ることができ、そうして神のもとに帰る道を着実に進むことができます。

**第１２節**

कर्मण्यस्मिन्ननाश्वासे धूमधूम्रात्मनां भवान् ।
आपाययति गोविन्दपादपद्मासवं मधु ॥ १२ ॥

*karmaṇy asminn anāśvāse*
*dhūma-dhūmrātmanāṁ bhavān*
*āpāyayati govinda-*
*pāda-padmāsavaṁ madhu*

*karmaṇi*—～の執行; *asmin*—これに関して; *anāśvāse*—確実性なしで; *dhūma*—煙; *dhūmra-ātmanām*—～じみた体と心; *bhavān*—あなた自身; *āpāyayati*—非常に心地よい; *govinda*—人格主神; *pāda*—足; *padma-āsavam*—蓮華の花の甘露; *madhu*—蜂蜜。

私たちは、果報的活動でもあるこの火の儀式をはじめたばかりですが、その行為そのものに数多くの不備があるために、どのような結果をもたらすのかわからないままに行なっています。私たちの体は煙のために黒くなりましたが、あなたが私たちに分け与えてくださっている人格主神ゴーヴィンダの蓮華の御足からあふれる甘露を感じ、ほんとうに喜びを味わっています。

### 要旨解説

ナイミシャーラニャの聖者たちが焚いた儀式の火からは、多くの欠陥があったために、まちがいなく煙や疑いが作りだされました。最初の欠陥は、カリ時代ではそのような儀式を首尾良くこなせる熟達したブラーフマナ不足ほとんどいなかった、という点にあります。そのような儀式で生じる矛盾の結果、儀式全体が台無しになり、農業のように不確かな結果しか得られません。農耕から良好な結果を得られるどうかは自然の摂理による降雨に依存しているため、結果は見越せません。同じように、カリ時代ではどのような儀式をしても、どのような結果が得られるかどうか定かではありません。カリ時代の無節操で貪欲なブラーフマナたちは、「カリ時代で真の結果をもたらす儀式執行は、主の聖なる名前を集まって唱える儀式である」という経典の教えを人々に教えず、無知な大衆にあやふやで名ばかりの儀式を見せびらかしているだけです。スータ・ゴースヴァーミーは、集まっている聖者たちに主の超越的な活動について説明し、聞いたかれらも主の超越的な活動を聞いて甘露を味わっています。私たちも、食べ物を食べて満足感が得られるように、この事実を感じとることができます。

ナイミシャーラニャの聖者たちは儀式の火から出てくる煙に苦しめられ、儀式の結果も定かではありませんでしたが、スータ・ゴースヴァーミーのような悟った人物から話を聞くことで、心から満足していました。『ブラフマ・ヴァイヴァルタ・プラーナ』では、ヴィシュヌがシヴァに、さまざまな不安に満ちたカリ時代の人々は、果報的活動や哲学的推論を無益に行なうことしかできないけれども、献愛奉仕をすれば結果はまちがいなく得られ、エネルギーを無駄にすることはない、と話しています。言いかえれば、主に献愛奉仕をしなければ、精神的悟りにしろ物質的な恩恵にしろ、成功はできないということです。

### 第１３節

तुलयाम लवेनापि न स्वर्गं नापुनर्भवम् ।
भगवत्सङ्गिसङ्गस्य मर्त्यानां किमुताशिषः ॥ १३ ॥

*tulayāma lavenāpi*
*na svargaṁ nāpunar-bhavam*
*bhagavat-saṅgi-saṅgasya*
*martyānāṁ kim utāśiṣaḥ*

*tulayāma*—〜と等しい; *lavena*—一瞬によって; *api*—〜でさえ; *na*—決して〜ない; *svargam*—天国の惑星; *na*—どちらも〜でない; *apunaḥ-bhavam*—物質からの解放; *bhagavat-saṅgi*—主の献愛者; *saṅgasya*—交流の; *martyānām*—死んでいく者達; *kim*—あるだろうか; *uta*—〜に言及する; *āśiṣaḥ*—俗な恩恵。

主の献愛者とのふれあいは、たとえほんのわずかな時間であっても、天国の惑星や物質からの解放とは比べものにもなりません。ならば、死にゆく者たちのためにある物質的な繁栄という形の俗な恩恵など、言うまでもありません。

**要旨解説**

共通した論点がいくつかある場合、それらを比較することができます。しかし、純粋な献愛者とのふれあいを物質的なものと比べることはできません。物質的な幸福に没頭している人たちは、月、金星、インドラローカのような天国の惑星に行きたいと強く願い、また物質的な哲学的推論に熟達している人々は物質的束縛からの解放を強く願っています。こういった物質的な発達にことごとく見放された人は、反対の種類の解放、アプナル・バヴァ（*apunar-bhava*）、つまり「ふたたび誕生しない境地」を望むようになります。ところが主の純粋な献愛者は、天界での幸せも、物質的束縛から解放されることも望みません。言いかえると、かれらにとって天界での物質的な喜びはどれも蜃気楼にすぎず、喜びや悲しみという物質的概念から解放されているからこそ、物質界にいながらすでに解放されているのです。これは、物質界にいようと精神界にいようと、純粋な献愛者は超越的境地、すなわち主への愛情奉仕のなかで生きているということです。政府の役人は官庁にいても、あるいは家庭や別の場所にいても同じ境遇にいるように、献愛者は主への超越的な奉仕だけに打ちこんでいるので、物質的なものとはいっさいかかわりません。物質的なものにかかわっていないのですから、肉体の死滅とともに終わってしまう国王や君主の地位といった物質的な恩恵から喜びを得ているものでしょうか。献愛奉仕は永遠で精神的ですから、終わりはありません。そして純粋な献愛者の美質は物質的な美質とはまったく異質のものですから、２つを比べることなどできるわけがありません。スータ・ゴースヴァーミーは純粋な献愛者でした。だからこそ、ナイミシャーラニャのリシたちの交流

はひじょうにユニークです。著しい物質主義者とのつきあいは非難されています。物質主義者のことを*yoṣit-saṅgī*（ヨーシトゥ・サンギー）「物質的な束縛（女性やさまざまな物事）に強く執着している者」と言います。その執着は条件づけられているため、健全な生活と繁栄という恩恵を台無しにします。正反対の人を*bhāgavata-saṅgī*（バハーガヴァタ・サンギー）「主の名前・姿・気質などといつもふれあっている者」と言います。そのようなふれあいこそ望ましく、讃えられるにふさわしいのであり、それを人生の最高目標と捉えることもできます。

**第１４節**

को नाम तृप्येद् रसवित्कथायां
महत्तमैकान्तपरायणस्य ।
नान्तं गुणानामगुणस्य जग्मु-
र्योगेश्वरा ये भवपाद्मुख्याः ॥ १४ ॥

*ko nāma tṛpyed rasavit kathāyāṁ*
*mahattamaikānta-parāyaṇasya*
*nāntaṁ guṇānām aguṇasya jagmur*
*yogeśvarā ye bhava-pādma-mukhyāḥ*

*kaḥ*—彼は誰か; *nāma*—特に; *tṛpyet*—完全な満足を手に入れる; *rasa-vit*—円熟した甘露を味わうことに巧みである; *kathāyām*—～の話題において; *mahat-tama*—生命体のなかで最大の生命体達; *ekānta*—独占的に; *parāyaṇasya*—～の庇護地である者の; *na*—決して～ない; *antam*—終わり; *guṇānām*—特質の; *aguṇasya*—超越性の; *jagmuḥ*—確認できた; *yoga-īśvarāḥ*—神秘的力の主達; *ye*—彼らすべて; *bhava*—主シヴァ; *pādma*—主ブラフマー; *mukhyāḥ*—筆頭者達。

人格主神、主クリシュナ（ゴーヴィンダ）は、すべての生命体にとって唯一の保護者であり、その超越的な特質は、主シヴァや主ブラフマーのような神秘的力の主（ぬし）でさえ推しはかることはできません。甘露（ラサ）を巧みに味わえる者が、主にまつわる話題を聴いて完全な充足感を得られるものでしょうか。

**要旨解説**

主シヴァと主ブラフマーは半神たちのなかでも主要な存在であり、神秘的力あふれる方たちです。たとえば主シヴァは毒の海を飲み干しましたが、ふつうの生命体がその１滴でも飲めば

すぐに命を落とすほどの毒でした。同じようにブラフマーは、主シヴァを含む力強い半神たちを創造するほどの力をそなえています。ですから二人はイーシュヴァラ・宇宙の主人と呼ぶこともできるでしょう。しかしそれでも、それが最上級の力というわけではありません。最高の力ではないのです。もっとも力強い方はゴーヴィンダ、主クリシュナです。主は超越性そのものであり、その超越的特質はシヴァやブラフマーといった力強いイーシュヴァラにもわかりません。だからこそ主クリシュナは、もっとも偉大な生命体たちにでさえ唯一の保護者なのです。ブラフマーも生命体の一人として数えられていますが、それでも私たち生命体のなかでも最大級の方です。ではなぜ、全生命体の最大の生命体が主クリシュナの超越的な話題にそれほど魅了されるのでしょうか。主がすべての喜びの源だからです。だれもが、なにをするにしてもなにかの喜びを味わいたいと思っていますが、主に超越的な愛情奉仕をしている人はそのような奉仕から尽きることのない喜びを味わうことができます。主は無限の方であり、主の名前、特質、崇高な娯楽、身の回りの物事、多様性など、すべてが無限であり、それを味わうことのできる人たちは無限の喜びを味わうのですが、その喜びに上限はありません。この事実は『パドゥマ・プラーナ』で確証されています。

*ramante yogino 'nante*
*satyānanda-cid-ātmani*
*iti rāma-padenāsau*
*paraṁ brahmābhidhīyate*

「神秘主義者は絶対真理者から無限の超越的喜びを味わっており、そのことから、至高の絶対真理者・人格主神はラーマという名前で呼ばれている」

そのような超越的な話題に終わりはありません。俗な物事のなかには飽満という法則に縛られますが、超越的物事に関しては「飽きる」という感情は起こりません。スータ・ゴースヴァーミーはナイミシャーラニャの聖者たちに向かって主クリシュナの話題を語りつづけたいと思い、聖者たちもかれから話を喜んで聞きつづける思いを告げました。主は超越的で、その特質も超越的ですから、主にまつわる話題は心の清い聴衆の「迎え入れる思い」をさらに高めてくれます。

**第１５節**

तन्नो भवान् वै भगवत्प्रधानो
महत्तमैकान्तपरायणस्य ।

हरेरुदारं चरितं विशुद्धं
शुश्रूषतां नो वितनोतु विद्वन् ॥ १५ ॥

*tan no bhavān vai bhagavat-pradhāno*
*mahattamaikānta-parāyaṇasya*
*harer udāraṁ caritaṁ viśuddhaṁ*
*śuśrūṣatāṁ no vitanotu vidvan*

*tat*—ゆえに; *naḥ*—私達の; *bhavān*—優れたあなた; *vai*—確かに; *bhagavat*—人格主神と関連して; *pradhānaḥ*—おもに; *mahat-tama*—偉人の中の筆頭者; *ekānta*—独占的に; *parāyaṇasya*—保護者の; *hareḥ*—主の; *udāram*—公平な; *caritam*—活動; *viśuddham*—超越的; *śuśrūṣatām*—許容心のある者達; *naḥ*—私達自身; *vitanotu*—どうか話してくださいe; *vidvan*—博識な者よ。

おおスータ・ゴースヴァーミーよ。あなたは博識で、主の純粋な献愛者です。人格主神だけが奉仕を捧げるもっとも大切な方だと考えておられるからです。ですからどうか、物質的観念を超越している主の崇高な娯楽についてご説明ください。私たちはそのような話を聞きたいと心から願っています。

**要旨解説**

主の超越的な活動について話す人は、崇拝と奉仕の唯一の対象者、すなわち主クリシュナ、最高人格主神を心に定めておかなくてはなりません。そしてその話題を聞く聴衆は、主について聞こうとする熱い思いがなくてはなりません。両方の、つまり資格をそなえた語り手と聴衆がそろえば、超越性について意気投合した話し合いを続けることができます。プロの吟唱家と物質的なことしか頭にない聴衆が話を交わしてもほんとうの恩恵は得られません。職業吟唱家は、自分の家族維持のためにみせかけのバーガヴァタ・サプターハを開き、物質的聴衆は宗教・富・感覚の満足・解放という俗な恩恵が目的でその話を聞きます。そのような『シュリーマド・バーガヴァタム』の話し合いは、物質的な質という穢れからは清められません。しかし、ナイミシャーラニャの聖者たちとシュリー・スータ・ゴースヴァーミーが交わした話は超越的な次元でなされました。物質的な利益とはなんの関係もないのです。聴衆も語り手もそのような会話をとおして無限の超越的喜びを味わいますから、何千年ものあいだ話し続けることができます。いまではバーガヴァタ・サプターハは７日間しか続けられず、その見せ物が終わると、聴衆も語り手もいつもの物質的な活動に戻ります。そのような愚かなことができるのは、ここで

述べられているように、語り手はバガヴァトゥ・プラダーナ（*bhagavat-pradhāna*）ではなく、聴衆もシュシュルーシャターンム（*śuśrūṣatām*）ではないからです。

**第１６節**

स वै महाभागवतः परीक्षिद्
येनापवर्गाख्यमदभ्रबुद्धिः ।
ज्ञानेन वैयासकिशब्दितेन
भेजे खगेन्द्रध्वजपादमूलम् ॥ १६ ॥

*sa vai mahā-bhāgavataḥ parīkṣid*
*yenāpavargākhyam adabhra-buddhiḥ*
*jñānena vaiyāsaki-śabditena*
*bheje khagendra-dhvaja-pāda-mūlam*

*saḥ*—彼; *vai*—確かに; *mahā-bhāgavataḥ*—一流の献愛者; *parīkṣit*—その王; *yena*—〜であるものによって; *apavarga-ākhyam*—解放という名前で; *adabhra*—固定されて; *buddhiḥ*—知性; *jñānena*—知識によって; *vaiyāsaki*—ヴャーサの子; *śabditena*—〜によって語られた; *bheje*—頼って; *khaga-indra*—ガルダ、鳥の王者; *dhvaja*—旗; *pāda-mūlam*—足の裏。

おおスータ・ゴースヴァーミーよ。それらの主の話題についてお話しください。解放に重いが定められていたマハーラージャ・パリークシットはその話題をとおして主の、鳥の王者であるガルダが身をゆだねた主の蓮華の御足を達成しました。それらの話題はヴャーサの子（シュリーラ・シュカデーヴァ）によって語られたのです。

**要旨解説**

解放の道を歩んでいる生徒のあいだには、争点がいくつかあります。超越的な生徒とは、非人格論者と主の献愛者のことです。主の献愛者は主の超越的な姿を崇拝しますが、非人格論者はまばゆい光輝、すなわち主の体から放たれている光であるブラフマジョーティを瞑想します。この節では、「マハーラージャ・パリークシットは、ヴャーサデーヴァの子息であるシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの教えをとおして主の蓮華の御足を達成した」と言われています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーははじめは非人格論者で、そのことをみずから『シュリーマド・バーガヴァタム』（第２編・第１章・第９節）で認めています。しかしそ

のあと主の崇高な娯楽のとりこになり、献愛者になりました。完璧な知識をそなえるそのような献愛者は、マハー・バーガヴァタ（*mahā-bhāgavata*）「一流の献愛者」と呼ばれています。献愛者は３段階、すなわちプラークリタ（*prākṛta*）、マデャマ（*madhyama*）、マハー・バーガヴァタに分けられます。プラークリタ・三流の献愛者は、主や主の献愛者に関する特別の知識もそなえていない寺院の崇拝者です。マデャマ・二流の献愛者は、主のことも、主の献愛者のことも、初心の献愛者のことも、そして献愛者ではない人々のこともよく知っています。しかし、マハー・バーガヴァタという一流の献愛者はすべてを主と関連づけて見ますし、すべての人々と関連づけて主を見ます。ですからマハー・バーガヴァタはだれでも、とくに献愛者と非献愛者との区別をつけません。マハーラージャ・パリークシットはそのようなマハー・バーガヴァタでした。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーというマハー・バーガヴァタの献愛者から入門式を受けたからです。だれにも、カリの権化にも慈悲を授けた人物ですから、ほかの人に優しい方であることは言うまでもありません。

このように、世界の超越的な歴史には、非人格論者からのちに献愛者になった人物に関する記述が数多く残されています。しかし、献愛者はぜったいに非人格論者にはなりません。この真実がはっきりと証明しているのは、献愛者が手に入れた超越的な境地は、非人格論者の境地よりも高いということです。『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第５節）でも述べられているように、非人格論の境地にしがみついている人々は、真実に到達するのではなく、さまざまな苦しみを経験しなくてはなりません。ですから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーからマハーラージャ・パリークシットに授けられた知識は、マハーラージャ・パリークシットを主への奉仕に到達する助けになりました。そしてこの完璧な境地はアパヴァルガ（*apavarga*）、解放という完璧な境地、と呼ばれています。知識だけを得た解放は物質的な知識にすぎません。物質的束縛からの真の自由が解放であり、そして主への超越的奉仕を達成することが完璧な解放の境地です。その境地は、『シュリーマド・バーガヴァタム』（第１編・第２章・第12節）で説明されているように、知識と放棄をとおして得られるものであり、そして完璧な知識の結果は、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって授けられたように、主への超越的な奉仕の達成です。

### 第１７節

तन्नः परं पुण्यमसंवृतार्थ-
मार्ख्यानमत्यद्भुतयोगनिष्ठम् ।

आख्याह्यनन्ताचरितोपपन्नं
पारीक्षितं भागवताभिरामम् ॥ १७ ॥

*tan naḥ paraṁ puṇyam asaṁvṛtārtham*
*ākhyānam atyadbhuta-yoga-niṣṭham*
*ākhyāhy anantācaritopapannaṁ*
*pārīkṣitaṁ bhāgavatābhirāmam*

*tat*—ゆえに; *naḥ*—私達に; *param*—至高の; *puṇyam*—浄化している; *asaṁvṛta-artham*—ありのままに; *ākhyānam*—話; *ati*—非常に; *adbhuta*—素晴らしい; *yoga-niṣṭham*—バクティ・ヨーガで満たされて; *ākhyāhi*—説明する; *ananta*—無限の方; *ācarita*—活動; *upapannam*—〜で満たされて; *pārīkṣitam*—マハーラージャ・パリークシットに語られて; *bhāgavata*—純粋な献愛者達の; *abhirāmam*—特に非常に愛しい。

ですから、私たちを浄化させ、そして頂点の無限なる方にまつわる話をお授けください。それはマハーラージャ・パリークシットに語られ、そしてバクティ・ヨーガに満たされているからこそ、純粋な献愛者にはとても尊いものです。

**要旨解説**

マハーラージャ・パリークシットに語られ、そして純粋な献愛者にとってとても尊いのは『シュリーマド・バーガヴァタム』です。『シュリーマド・バーガヴァタム』はおもに、至高の無限なる方の活動にまつわる話が満載されているため、バクティ・ヨーガの科学、すなわち主の献愛奉仕そのものです。ですからそれはパラ（*para*）・至高の文献と言えます。知識や宗教についてすべて網羅されているのですが、とくに主への献愛奉仕に関する話題で満たされているからです。

**第１８節**

*सूत उवाच*
अहो वयं जन्मभृतोऽद्य हास्म
वृद्धानुवृत्त्यापि विलोमजाताः ।
दौष्कुल्यमाधिं विधुनोति शीघ्रं
महत्तमानामभिधानयोगः ॥ १८ ॥

*sūta uvāca*
*aho vayaṁ janma-bhṛto 'dya hāsma*
*vṛddhānuvṛttyāpi viloma-jātāḥ*
*dauṣkulyam ādhiṁ vidhunoti śīghraṁ*
*mahattamānām abhidhāna-yogaḥ*

*sūtaḥ uvāca*—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *aho*—どのように; *vayam*—私たち; *janma-bhṛtaḥ*—誕生において高められて; *adya*—今日; *ha*—明確に; *āsma*—〜になった; *vṛddha-anuvṛttyā*—高い知識を持つ者達に仕えることで; *api*—〜ではあっても; *viloma-jātāḥ*—混成の階級に誕生して; *dauṣkulyam*—誕生という無資格; *ādhim*—苦しみ; *vidhunoti*—浄化する; *śīghram*—すぐに; *mahat-tamānām*—偉大な者達の; *abhidhāna*—会話; *yogaḥ*—関係。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「おお神よ。私たちは混ざり合った階級のなかに誕生しましたが、知識の豊富な偉大な人物に仕え、そして従うだけで高い生得権を得ることができました。そのような偉大な魂たちと話を交わすだけで、すぐさま、低い家庭に生まれることによる資格の欠如を補うことができます」

**要旨解説**

スータ・ゴースヴァーミーは、ブラーフマナの家系に誕生した方ではありませんでした。混成のカースト、つまり非文化的な家庭の生まれです。しかし、シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーやナイミシャーラニャの聖者たちと気高い交流をすることで、低い誕生に生まれることで生じる資格のなさはすべて洗い流されました。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはその原則どおりにヴェーダの慣例を遂行し、その結果、低い家庭に誕生した人々、あるいはそのような誕生や行ないゆえに資格がないとされた人々を献愛奉仕の生活に高め、かれらをアーチャーリャ（権威者）としての立場に確立させました。主は明言しました——だれでも、どんな人であっても、ブラーフマナであろうとシュードラとして生まれても、社会のなかで世帯者や商人として働いていても、クリシュナの科学に精通すれば、アーチャーリャ、グル・精神指導者として迎えられる、と。

スータ・ゴースヴァーミーはシュカデーヴァやヴャーサデーヴァのような偉大なリシや権威者からクリシュナの科学を学び、そして高尚な資格をそなえた結果、ナイミシャーラニャの聖者たちでさえ、クリシュナの科学を『シュリーマド・バーガヴァタム』という形でかれから熱

心に聞こうとしました。つまり、聞いて布教することで偉大な魂と二通りの交流に恵まれたということです。超越的な科学、すなわちクリシュナの科学は権威者から学ぶべきものであり、その科学を布教する人は、さらに資格を高めることができます。このように、スータ・ゴースヴァーミーは両方の利点に恵まれたのであり、まちがいなく、低い誕生と心の苦しみという「無資格」からまったく解放されていました。この節は、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはスータ・ゴースヴァーミーに超越的な科学を教えることを拒否したわけでもなく、またナイミシャーラニャの聖者たちも、相手が低い誕生だからという理由で聞くことを拒んだわけではないことをはっきりと証明しています。これは数千年前でさえ、劣る家庭に生まれても超越的な科学を学んだり広めたりすることにはなんの障害もなかったということです。ヒンドゥ社会のいわゆる厳格なカースト制度は、最近100年のあいだに、高いカーストに生まれても資格のないドゥヴィジャ・バンドゥたちが増えたことではびこるようになったものです。主シュリー・チャイタンニャは本来のヴェーダ体系を復活させ、そしてみずからイスラムの家庭に誕生したタークラ・ハリダーサをナーマーチャーリャという主の聖なる名前の栄光を布教する権威者としました。

それが主の純粋な献愛者の力です。ガンジス川の水が純粋であることはだれでも受けいれており、その水で沐浴をすれば純粋になることができます。しかし主の偉大な献愛者の場合、低い家族に生まれた人はただその献愛者を見るだけで、堕落した魂を清めることができます。ならば、じかに交流することの結果は言うまでもありません。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは資格ある布教徒を全世界に送ることで穢れた世界を清めたいと考えましたが、この使命を科学的に学び、最善の人道主義的活動をはじめるかどうかはインド人しだいです。現代人の心の病は体の病気よりも深刻であり、できるだけ早く全世界に『シュリーマド・バーガヴァタム』を布教することが最適かつ適切な方法です。この節の*mahattamānām abhidhāna*（マハッタマーナーンム　アビヒダハーナ）は、偉大な献愛者の辞書、あるいは偉大な献愛者の言葉が満載された本という意味です。偉大な献愛者と主のそのような辞書とは、ヴェーダやそれに類する文献、とくに『シュリーマド・バーガヴァタム』のことを指しています。

### 第１９節

कुतः पुनर्गृणतो नाम तस्य
　　महत्तमैकान्तपरायणस्य　　।
योऽनन्तशक्तिर्भगवाननन्तो
　　महद्गुणत्वाद् यमनन्तमाहुः ॥ १९ ॥

*kutaḥ punar gṛṇato nāma tasya*
*mahattamaikānta-parāyaṇasya*
*yo 'nanta-śaktir bhagavān ananto*
*mahad-guṇatvād yam anantam āhuḥ*

*kutaḥ*—言うまでもない; *punaḥ*—再び; *gṛṇataḥ*—唱える者; *nāma*—聖なる名前; *tasya*—主の; *mahat-tama*—偉大な献愛者; *ekānta*—〜を除いて; *parāyaṇasya*—〜に保護を求める者の; *yaḥ*—〜である主; *ananta*—〜は無限なる方である; *śaktiḥ*—力; *bhagavān*—人格主神; *anantaḥ*—計り知れない; *mahat*—偉大な; *guṇatvāt*—そのような特質のため *yam*—〜である者に; *anantam*—アナンタ（*ananta*）という名前によって; *āhuḥ*—〜と呼ばれる。

ならば、無限の力を持つ無限なる方の聖なる名前を唱えている偉大な献愛者たちの指揮下にいる人々は、言うまでもありません。無限の力と超越的な特質をそなえた人格主神は、アナンタ（無限なる者）と呼ばれています。

**要旨解説**

ドゥヴィジャ・バンドゥ（*dvija-bandhu*）、つまり高い階級に生まれたのに、知性もなく、文化的はとは言いがたい輩は、低い階級に生まれた人が現世でブラーフマナになる考えに反論します。シュードラの家庭、あるいはシュードラよりも低い誕生は、前世の罪な行ないのために起こることだから、そのような誕生ゆえに生じる不遇の期間を終えなくてはならない、と主張します。このようなまちがった考え方に対して『シュリーマド・バーガヴァタム』は、「純粋な献愛者に導かれて主の聖なる名前を唱える者は、低い階級に生まれたことによる不利な境遇からすぐに解放される」と言い切っています。純粋な献愛者は、聖なる名前を冒涜することなく唱えます。聖なる名前の唱名には10の禁止事項があります。純粋な献愛者に導かれて唱えれば、冒涜することなく唱えられます。冒涜しないで唱えることは超越的ですから、そのように唱えれば過去の罪すべてからすぐに浄化されます。冒涜のない唱名は、聖なる名前の超越的質を知りつくし、知っているから主に身をゆだねていることを示しています。主の聖なる名前と主自身は、どちらも超越的で絶対的ですから同じです。聖なる名前には主と同じ力があります。主はあらゆる力をそなえた人格主神であり、無数の名前を持ち、その名前は主と同じで、同じ力をそなえています。主は『バガヴァッド・ギーター』の最後の言葉として、「完全に主に身をゆだねた人は、その恩寵であらゆる罪から守られる」と断言しています。主の名前と主自身は同じですから、主の聖なる名前は献愛者を罪の反動すべてから守ってくれます。主の聖

なる名前の唱名は、まちがいなく私たちを、低い階級に生まれた不利な状況から救ってくれます。主の無限の力は献愛者と化身という無限の拡張体をとおして広がりつづけていますから、主の献愛者や化身はすべて、主と同じ力をそなえています。献愛者は主の力で満たされていますから、低い誕生による不利な境遇のために邪魔されることなく突き進むことができます。

### 第２０節

एतावतालं ननु सूचितेन
गुणैरसाम्यानतिशायनस्य ।
हित्वेतरान् प्रार्थयतो विभूति-
र्यस्याङ्घ्रिरेणुं जुषतेऽनभीप्सोः ॥ २० ॥

*etāvatālaṁ nanu sūcitena*
*guṇair asāmyānatiśāyanasya*
*hitvetarān prārthayato vibhūtir*
*yasyāṅghri-reṇuṁ juṣate 'nabhīpsoḥ*

*etāvatā*—これまで; *alam*—不必要な; *nanu*—～するにしても; *sūcitena*—記述によって; *guṇaiḥ*—特質によって; *asāmya*—計り知れない; *anati-śāyanasya*—誰も優ることのできない者の; *hitvā*—わきに置いている; *itarān*—他の者達; *prārthayataḥ*—～を求める者達の; *vibhūtiḥ*—幸運の女神の恩寵; *yasya*—～である者; *aṅghri*—足; *reṇum*—埃; *juṣate*—仕える; *anabhīpsoḥ*—不本意の者の。

主（人格主神）は無限な方であり、主と等しい者はだれもいないことがいま確かめられました。ゆえに、だれも主について正しく語りつくすことはできません。偉大な半神たちでさえ、幸運の女神に祈りをささげるだけではその恩寵を授かることはできません。女神自身が仕えているのは、その奉仕を受けるつもりではない主その方なのです。

### 要旨解説

シュルティでは「人格主神、すなわちパラメーシュヴァラ・パラブラフマンにはすることがなにもない」と言われています。主に等しい者、匹敵する者、また主を凌ぐことができる者もいません。主には無限の力があり、なにをするにしても、その活動は自然に、完璧に、秩序正しく行なわれます。このように、最高人格主神はみずからの内で完璧な方であり、ブラフマー

のような偉大な半神をも含むだれからもなにも受けとる必要はありません。ふつうの生命体は幸運の女神の恩寵を求めており、女神はそのような祈りを捧げられても恩寵を授けることをためらっています。しかしそのような女神が最高人格主神に奉仕をしているのです――主は受けとるつもりはないのに。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌの姿にいる人格主神は、主に永遠に仕えている幸運の女神の胎内ではなく、自分の臍から延びている蓮華の茎のうえでブラフマーを作りました。これらが、主がそなえる無欠の独立性と完璧さの例です。主にはすることがない、からといって、主に姿がないわけではありません。主には人智を絶する力が超越的にあふれ、主はただ望むだけで、特に自分でなにかをしたり努力したりしなくてもすべては行なわれます。ですから、主はヨーゲーシュヴァラ、すべての神秘的力の主人、と呼ばれています。

**第２１節**

अथापि यत्पादनखावसृष्टं
जगद्विरिञ्चोपहृतार्हणाम्भः ।
सेशं पुनात्यन्यतमो मुकुन्दात्
को नाम लोके भगवत्पदार्थः ॥ २१ ॥

*athāpi yat-pāda-nakhāvasṛṣṭaṁ*
*jagad viriñcopahṛtārhaṇāmbhaḥ*
*seśaṁ punāty anyatamo mukundāt*
*ko nāma loke bhagavat-padārthaḥ*

*atha*—ゆえに; *api*—確かに; *yat*—〜である者の; *pāda-nakha*—足の爪; *avasṛṣṭam*—発している; *jagat*—全宇宙; *viriñca*—ブラフマジー; *upahṛta*—集めた; *arhaṇa*—崇拝する; *ambhaḥ*—水; *sa*—〜と共に; *īśam*—主シヴァ; *punāti*—浄化する; *anyatamaḥ*—ほかの誰か; *mukundāt*—人格主神シュリー・クリシュナのほかに; *kaḥ*—誰; *nāma*—名前; *loke*—世界の中で; *bhagavat*—至高主; *pada*—立場; *arthaḥ*—〜の価値がある。

人格主神シュリー・クリシュナ以外に、至高主の名にふさわしい者がいるでしょうか。ブラフマジーは主の御足の爪から流れ出している水を集め、心をこめて主シヴァに与えて歓迎しました。この水（ガンジス川）は全宇宙を、主シヴァを含め、清めることができるのです。

## 要旨解説

無知な人々はヴェーダ経典が多くの神々について教えていると考えていますが、それはまちがっています。主は唯一無二の方ですが、みずからを無数の姿に分身させました。そのこともヴェーダが確証しています。主の拡張体に限りはありませんが、生命体もそのなかに含まれています。生命体は主の完全拡張体ほどの力はなく、そのため拡張体には２種類あります。主ブラフマーは生命体の一人で、いっぽう主シヴァは主と生命体の中間にいます。言いかえると、主ブラフマーや主シヴァほどの主要な半神でも、主ヴィシュヌ・最高人格主神とは等しくもなれないし、また凌ぐこともできないということです。幸運の女神ラクシュミー、ブラフマーやシヴァなど強力な半神はヴィシュヌあるいは主クリシュナを崇拝しています。ですからほかのだれが、真に最高人格主神と呼ばれるほど、ムクンダ（主クリシュナ）に匹敵する力を持っているでしょうか。ラクシュミジー、主ブラフマー、主シヴァも独立して力を持っているわけではありません。至高主の拡張体としての力を持っているのであり、私たちふつうの生命体のように、かれらも主に超越的な愛情奉仕をしています。崇拝できる主の献愛者にの流れには４種類あり、そのなかでブラフマ・サンプラダーヤ、ルドラ・サンプラダーヤ、シュリー・サンプラダーヤが主要で、それぞれ主ブラフマー、主シヴァ、幸運の女神ラクシュミーから直接伝わっています。ほかに、サナトゥ・クマーラから伝わるクマーラ・サンプラダーヤがあります。この４種類の根源のサンプラダーヤに従う人たちはすべて、現代にいたるまで主への超越的な奉仕を綿密に行なっており、だれもが異口同音に、主クリシュナすなわちムクンダこそが最高人格主神であり、主と等しかったり凌いだりする者はほかにいない、と宣言しています。

### 第２２節

यत्रानुरक्ताः सहसैव धीरा
　　व्यपोह्य देहादिषु सङ्गमूढम् ।
व्रजन्ति तत्पारमहंस्यमन्त्यं
　　यस्मिन्नहिंसोपशमः स्वधर्मः ॥ २२ ॥

*yatrānuraktāḥ sahasaiva dhīrā*
　*vyapohya dehādiṣu saṅgam ūḍham*
*vrajanti tat pārama-haṁsyam antyaṁ*
　*yasminn ahiṁsopaśamaḥ sva-dharmaḥ*

*yatra*—〜である者に; *anuraktāḥ*—堅く執着して; *sahasā*—突然; *eva*—確かに; *dhīrāḥ*—自己抑制した; *vyapohya*—〜を捨てて; *deha*—濃密な肉体と希薄な心; *ādiṣu*—〜に関連している; *saṅgam*—執着; *ūḍham*—〜を受けいれて; *vrajanti*—離れていく; *tat*—それ; *pārama-haṁsyam*—最高完成の境地; *antyam*—そしてそれを超えて; *yasmin*—〜である物事の中に; *ahiṁsā*—非暴力; *upaśamaḥ*—そして放棄心; *sva-dharmaḥ*—結果としての本務。

至高主・主クリシュナに心が没頭している自己抑制の人物は、濃密な体や希薄な心を含む物質的な執着の世界をすぐにでも捨てることができ、そして非暴力と放棄心に到達できる放棄階級の生活という最高完成を求めて立ち去ることができます。

**要旨解説**

自己を抑制する人だけが最高人格主神に徐々に執着できるようになっていきます。自己を抑制するとは、必要以上に感覚の楽しみにかかわらないことを指します。抑制できない人は感覚の楽しみにふけっています。無味乾燥な推論も、裏をかえせば、心による希薄な形での感覚の楽しみです。感覚の楽しみは私たちを暗闇の道につれていきます。自己を抑制する人は、物質存在での条件づけられた生活から解放への道をつきすすむことができます。ですからヴェーダは、暗闇の道ではなく、光の道、すなわち解放の道をつきすすんでいなくてはならない、と教えています。自己を抑制する、とは、むりに感覚を物質的な楽しみから逸らすのではなく、純粋な感覚を超越的な奉仕に使うことに専念するという意味です。感覚はむりやり抑えることはできませんが、しかるべき対象に向けることはできます。ですから浄化された感覚はいつでも主への超越的な奉仕に使われるものです。感覚を正しく使うこの完璧な境地がバクティ・ヨーガです。ですから、バクティ・ヨーガに専念している人がほんとうに自己を抑制しているのであり、主への奉仕のために、家庭や肉体への執着をすぐにでも捨てることができます。これがパラマハンサの境地です。ハンサ（*haṁsa*）「白鳥」は、牛乳と水が混ざっていても牛乳だけを飲むことができます。同じように、マーヤーへの奉仕ではなく主への奉仕をする人物をパラマハンサといいます。かれらは、奢りや虚栄心のない心、非暴力、忍耐心、純朴な心、尊ぶ気持ち、崇拝、献身、誠実さなど、優れた気質にごく自然にそなえています。このような高貴な質はすべて、主の献愛者のうちにおのずとそなわっているものです。主への奉仕にすっかり専心しているパラマハンサは、めったにはいません——解放された魂のなかにでさえも。ほんとうの非暴力とは、だれをもそねむ気持ちがないことをいいます。物質界では、だれもが隣人を妬んでいます。しかし完璧なパラマハンサは、主への奉仕にすべてをゆだねているので、人をそねむ気持ちはみじんもありません。すべての人を至高主と結びつけて愛しているのです。ま

た真の放棄心とは、神にすっかり身をゆだねることを指します。どの生物もほかの生物に頼っています。そのように作られているのです。じっさい、だれもが至高主の慈悲のおかげで生きていられるのですが、主との絆を忘れてしまうと、物質自然界の条件に頼るようになります。放棄とは、物質自然界の条件に頼らず、主の慈悲だけにすがることを指します。真の独立とは、物質界の条件に頼るのではなく、主が必ず救ってくれると確信することです。これがパラマハンサの境地であり、至高主への献愛奉仕であるバクティ・ヨーガにおける最高完成の境地です。

### 第２３節

अहं हि पृष्टोऽर्यमणो भवद्भि-
　　राचक्ष आत्मावगमोऽत्र यावान् ।
नभः पतन्त्यात्मसमं पतत्त्रिण-
　　स्तथा समं विष्णुगतिं विपश्चितः ॥ २३ ॥

*ahaṁ hi pṛṣṭo 'ryamaṇo bhavadbhir*
*ācakṣa ātmāvagamo 'tra yāvān*
*nabhaḥ patanty ātma-samaṁ patattriṇas*
*tathā samaṁ viṣṇu-gatiṁ vipaścitaḥ*

*aham*—慎ましき私; *hi*—確かに; *pṛṣṭaḥ*—皆さんに質問された; *aryamaṇaḥ*—太陽のように力強い; *bhavadbhiḥ*—皆さんによって; *ācakṣe*—説明する; *ātma-avagamaḥ*—私の知識の及ぶ限り; *atra*—ここで; *yāvān*—〜に関する限り; *nabhaḥ*—空; *patanti*—飛ぶ; *ātma-samam*—それができる限り; *patattriṇaḥ*—鳥; *tathā*—こうして; *samam*—同様に; *viṣṇu-gatim*—ヴィシュヌの知識; *vipaścitaḥ*—博識ではあっても。

さて、リシたちよ。太陽のように力強く、そして純粋な心をそなえたみなさんに、私の知識のおよぶかぎり、ヴィシュヌの超越的な娯楽について話したいと思う。鳥たちが力のおよぶかぎり空を飛びつづけるように、博識な献愛者たちは悟りの程度に応じて、主について説明するのである。

### 要旨解説

至高絶対真理者は無限な方です。かぎられた能力しかない生命体には、無限なる方を知りつくすことなどとうていできるものではありません。主は非人格的でもあり、人格的でもあり、

また局所的でもあります。姿のない様相としては遍在するブラフマン、局所的様相としては全生命体の心臓のうちに住む方、人格としての窮極の様相では、主の幸運な交流者である純粋な献愛者の超越的な愛情奉仕の対象者です。さまざまな様相をとおしてくりひろげられる主の崇高な娯楽は、偉大で博識な献愛者によって部分的に悟られるにすぎません。ですから、シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーは、主の娯楽について自分が知っているだけを語るという正しい姿勢をしめしています。じっさい、主自身について語れるのは主しかいませんし、主の博識な献愛者は、説明する力を主から授かってこそ、説明することができるのです。

**第２４－２５節**

एकदा धनुरुद्यम्य विचरन् मृगयां वने ।
मृगाननुगतः श्रान्तः क्षुधितस्तृषितो भृशम् ॥ २४ ॥
जलाशयमचक्षाणः प्रविवेश तमाश्रमम् ।
ददर्श मुनिमासीनं शान्तं मीलितलोचनम् ॥ २५ ॥

*ekadā dhanur udyamya*
*vicaran mṛgayāṁ vane*
*mṛgān anugataḥ śrāntaḥ*
*kṣudhitas tṛṣito bhṛśam*

*jalāśayam acakṣāṇaḥ*
*praviveśa tam āśramam*
*dadarśa munim āsīnaṁ*
*śāntaṁ mīlita-locanam*

*ekadā*—昔; *dhanuḥ*—弓矢; *udyamya*—しっかりと握り; *vicaran*—追っている; *mṛgayām*—狩りの旅; *vane*—森で; *mṛgān*—鹿; *anugataḥ*—追っている間; *śrāntaḥ*—疲れた; *kṣudhitaḥ*—空腹を覚えて; *tṛṣitaḥ*—喉が渇いて; *bhṛśam*—極度に; *jala-āśayam*—水のある場所; *acakṣāṇaḥ*—～を探している間; *praviveśa*—～に入った; *tam*—その有名な; *āśramam*—シャミーカ・リシの庵; *dadarśa*—見た; *munim*—その聖者; *āsīnam*—座って; *śāntam*—完全な沈黙の; *mīlita*—閉じて; *locanam*—目。

むかしあるとき、マハーラージャ・パリークシットは弓矢を手に森へ狩りに出かけ、鹿を追

っているときにはげしい疲れ、飢え、喉の渇きに襲われた。水を求めて歩き、やがて名高いシャミーカ・リシの庵を見つけてなかに入ったが、リシは目を閉じて静かに座っていた。

**要旨解説**

至高主は献愛者にとても優しく、しかるべくときにその献愛者を自分のもとに呼びよせ、そうしてそのかれにとって吉兆な状況を作ります。マハーラージャ・パリークシットは純粋な献愛者でしたから、どうしようもなく疲れたり、飢えたり、喉がかわいたりするようなことはありません。体の要求に心乱されることはないのですから。しかし主が望みさえすれば、見た目には疲れたり喉がかわいたりしているようになり、献愛者が俗な活動を放棄する都合のいい状況を作りだします。神のもとに帰るには世間への執着をすべて捨てなくてはなりませんから、献愛者があまりにも世俗的なことに夢中になっていると、無関心を起こさせる状況を主が作ります。至高主は純粋な献愛者をぜったいに忘れません。はためには俗なことをしている献愛者だったとしてもです。ときに、主は苦しい状態を作りだすことがあり、そのために献愛者は俗なことを放棄しなくてはならなくなります。献愛者は主の合図をとおして気づきますが、献愛者ではない人は、じつに面倒で挫折感をいだかせる状況になってしまった、と考えます。マハーラージャ・パリークシットは主シュリー・クリシュナの考えで、『シュリーマド・バーガヴァタム』を世にしめす媒体者になる定めにありましたし、それは祖父のアルジュナが『バガヴァッド・ギーター』の媒体者となった状況と同じです。かりにアルジュナが主の意志で家族への愛着という幻想を捨てなかったら、聞く定めにあった人々に向けて主が『バガヴァッド・ギーター』を語ることはなかったことでしょう。同じように、マハーラージャ・パリークシットが疲れ、空腹になり、喉が乾かなかったとしたら、『シュリーマド・バーガヴァタム』も、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーというこの経典の主要な権威者によって語られなかったはずです。ですからこれは、すべての関係者たちの恩恵のために『シュリーマド・バーガヴァタム』語られる前ぶれだったのです。そのため、この前ぶれは「昔あるとき」という言葉で始まりました。

**第２６節**

प्रतिरुद्धेन्द्रियप्राणमनोबुद्धिमुपारतम् ।
स्थानत्रयात्परं प्राप्तं ब्रह्मभूतमविक्रियम् ॥ २६ ॥

*pratiruddhendriya-prāṇa-*
*mano-buddhim upāratam*
*sthāna-trayāt paraṁ prāptaṁ*
*brahma-bhūtam avikriyam*

*pratiruddha*—抑制されて; *indriya*—感覚器官; *prāṇa*—呼吸の空気; *manaḥ*—その心; *buddhim*—知性; *upāratam*—無活動; *sthāna*—場所; *trayāt*—３つの要素から; *param*—超越的; *prāptam*—到達して; *brahma-bhūtam*—至高絶対者と質的に等しい; *avikriyam*—影響を受けていない。

ムニの感覚器官、呼吸、心、知性はすべて物質的な活動から切りはなされ、至高の絶対者と質的にひとしい超越的な境地に到達し、３つの段階（目覚めた状態、夢、無意識）を超えた法悦境にいた。

**要旨解説**

王が入った庵にいたムニは、ヨーガの法悦境にいたかのように見えました。その超越的な境地は、３つの方法、すなわち超越性に関する理論的知識であるギャーナ、肉体の生理的・心理的機能を操作することによる法悦教という真の悟りであるヨーガの方法、そして感覚を主への献愛奉仕に使う方法であるもっとも認められたバクティ・ヨーガです。『バガヴァッド・ギーター』からも、意識を物質から生命体に徐々に高めていく情報を得ることができます。物質的な心や体は、生命体・魂から作りだされますが、物質の３つの質に影響されている私たちは自分の正体を忘れてしまっています。ギャーナは、魂の真実性について理論的に推測する方法です。しかしバクティ・ヨーガは精神魂を活動に向けます。物体に対する知覚は、さらに希薄な感覚に高められます。感覚はさらに希薄な心に高められ、そして呼吸活動はやがて知性に高められていきます。知性を超えた存在、すなわち精神魂は、ヨーガ法という機械的な活動によって、あるいは感覚を抑制する瞑想の修練によって、呼吸を制御し、知性を超越的な境地に高めることに適応させて悟ることができます。この法悦境に入れば、体の物質的活動は止まります。王は、その境地にいるムニを見たのでした。さらに、ムニを次のように見つめていました。

**第２７節**

विप्रकीर्णजटाच्छन्नं रौरवेणाजिनेन च ।
विशुष्यत्तालुरुदकं तथाभूतमयाचत ॥ २७ ॥

*viprakīrṇa-jaṭācchannaṁ*
*rauraveṇājinena ca*
*viśuṣyat-tālur udakaṁ*
*tathā-bhūtam ayācata*

*viprakīrṇa*—全身にちらばって; *jaṭa-ācchannam*—圧縮された長い髪; *rauraveṇa*—鹿皮で; *ajinena*—皮によって; *ca*—もまた; *viśuṣyat*—渇いて; *tāluḥ*—口内; *udakam*—水; *tathā-bhūtam*—その状態で; *ayācata*—〜を求めた。

深い瞑想のなかにあったその聖者は、鹿皮の衣服をまとい、長く、そして固まった長髪が全身にからみついていた。喉が渇ききっていた王は、水を乞うた。

**要旨解説**

喉が渇いていた王は水を求めました。これほどの偉大な献愛者が、法悦境にあった聖者に水を求めたのですから、背後に神の意志が働いていたことにまちがいはありません。そうでなければ、これほど希有なことが起こるわけがないのです。マハーラージャ・パリークシットはこうして苦境におちいりました。『シュリーマド・バーガヴァタム』が世にしめされるように。

**第２８節**

अलब्धतृणभूम्यादिरसम्प्राप्तार्घ्यसूनृतः ।
अवज्ञातमिवात्मानं मन्यमानश्चुकोप ह ॥ २८ ॥

*alabdha-tṛṇa-bhūmy-ādir*
*asamprāptārghya-sūnṛtaḥ*
*avajñātam ivātmānaṁ*
*manyamānaś cukopa ha*

*alabdha*—迎えられなかった; *tṛṇa*—ワラの席; *bhūmi*—場所; *ādiḥ*—など; *asamprāpta*—適切に迎えられなかった; *arghya*—接待のための水; *sūnṛtaḥ*—やさしい言葉; *avajñātam*—そのように無視されて; *iva*—そのように; *ātmānam*—個人的に; *manyamānaḥ*—そのように考えている; *cukopa*—怒った; *ha*—そのように。

王は、座る場所、水、歓迎のあいさつなど、作法にのっとったもてなしを受けなかったため、自分は無視されたと感じ、怒りをあらわにした。

**要旨解説**

ヴェーダ法典が示す歓迎の作法では、たとえ訪ねてきた相手が敵だとしても丁重にもてなさなくてはならない、とされています。敵として訪ねてきたことさえ相手に気づかれないよう迎えるのです。主クリシュナはアルジュナとビーマをつれて、マガダ国のジャラーサンダを敵として訪ねましたが、ジャラーサンダ王から壮麗な接待を受けました。客人でもある敵、つまりビーマはジャラーサンダと戦うことになっていたのですが、それでも丁重な歓迎を受けたのです。夜になれば、友人と客人として座り、昼になれば命をかけて激しく戦いました。それが接待の決まりです。接待の決まりとして、客人が来てもなにも出せないほど貧しい人は、質素であっても座る場所を勧め、水一杯を出して、よくおいでくださいました、などとやさしい言葉をかけなくてはなりません。ですから、客人を迎えることは、それが友人であろうと敵であろうと、たいせつなのはお金ではなく、心のこもったもてなしなのです。

マハーラージャ・パリークシットはシャミーカ・リシの庵の扉をあけて入りましたが、リシからたいそうな歓待を期待していたわけではありません。聖者やリシはふつう物質的に裕福ではなかったからです。しかしさすがに、質素な座も、一杯の水も、歓迎の言葉もないとは思っていませんでした。ありきたりの客人ではないし、リシの敵でもありませんでしたから、リシから冷淡に迎えられたことに、王はたいへんおどろきました。じっさい、一杯の水がなによりも欲しかったのですから、王には怒る権利があったのです。これほどのゆゆしい状況に置かれれば王が怒るのもうなずけるのですが、偉大な聖者以上の人物でもあったのですから、激怒し、行動を起こしたことにはおどろかされます。ですから、これは主の至高の意志によって定められていたのだ、と考えてしかるべきところです。しかし主の意志があったからこそ、この状況をとおして、王が家族との関係や政界から離れ、やがて主クリシュナの蓮華の御足にすっかり身をゆだねる機会が作りだされたのでした。心やさしい主は、純粋な献愛者たちを物質存在の只中から自分のもとに引き寄せるために、このような苦境を作ったりします。しかし献愛者はどうしても挫折感を味わうものです。主の献愛者はいつでも主に守られており、どのような状況に置かれても、それが失敗であろうと成功であろうと、主が献愛者にとって最高の案内人であることにかわりありません。ですから献愛者は、失意のどん底におちいっても、それが主からの祝福だと受けとるのです。

## 第２９節

अभूतपूर्वः सहसा क्षुत्तृड्भ्यामर्दितात्मनः ।
ब्राह्मणं प्रत्यभूद्ब्रह्मन् मत्सरो मन्युरेव च ॥ २९ ॥

*abhūta-pūrvaḥ sahasā*
*kṣut-tṛḍbhyām arditātmanaḥ*
*brāhmaṇaṁ praty abhūd brahman*
*matsaro manyur eva ca*

*abhūta-pūrvaḥ*—前例のない; *sahasā*—状況に応じて; *kṣut*—飢え; *tṛḍbhyām*—そして渇きによって; *ardita*—苦しめられて; *ātmanaḥ*—彼自身の; *brāhmaṇam*—ブラーフマナに; *prati*—〜に対して; *abhūt*—〜になった; *brahman*—ブラーフマナ達よ; *matsaraḥ*—嫉妬する; *manyuḥ*—怒る; *eva*—そのように; *ca*—そして。

ブラーフマナたちよ。ブラーフマナの聖者に向けられたその怒りと嫌悪心は、飢えと渇きという苦境におとしいれるためだったため、王にはそれまで体験したこともない事態だった。

### 要旨解説

マハーラージャ・パリークシットほどの王にとって、怒ったり嫌悪したりするのは、とりわけ相手が聖者やブラーフマナとあれば、それまで経験したことはなかったはずです。パリークシット王は、ブラーフマナ、聖者、子ども、女性、老人は、なにがあっても処罰の対象にはならないことをよく知っていました。さらに王たるもの、たとえ大きなまちがいをおかしても、悪事を働いたことにはなりません。しかしこの場合、マハーラージャ・パリークシットは、自分の飢えと渇きのために、そして主の意志が働いていたこともあって、聖者に怒りと嫌悪心を感じています。王には、自分を冷淡に迎えたり無視したりする市民を処罰する権利がありますが、その相手が聖者やブラーフマナだったのですから、体験したこともありませんでした。主はだれをも嫌悪することのない方ですから、主の献愛者も、だれをも嫌悪することはありません。マハーラージャ・パリークシットがとった態度の唯一の理由は、主が計画したことだったからです。

### 第３０節

स तु ब्रह्मऋषेरंसे गतासुमुरगं रुषा ।
विनिर्गच्छन्धनुष्कोट्या निधाय पुरमागतः ॥ ३० ॥

*sa tu brahma-ṛṣer aṁse*
*gatāsum uragaṁ ruṣā*
*vinirgacchan dhanuṣ-koṭyā*
*nidhāya puram āgataḥ*

*saḥ*—王; *tu*—しかしながら; *brahma-ṛṣeḥ*—ブラーフマナ聖者の; *aṁse*—肩に; *gata-asum*—死んでいる; *uragam*—蛇; *ruṣā*—怒って; *vinirgacchan*—去りながら; *dhanuḥ-koṭyā*—弓の先端で; *nidhāya*—それを置くことで; *puram*—宮殿; *āgataḥ*—戻った。

王は侮辱されたことに腹をたて、その場を離れるとき、死んだ蛇を弓で拾いあげて聖者の肩にかけた。そして宮殿にもどっていった。

### 要旨解説

王は聖者にしっぺがえしをしたのです。そんな愚かなことなどしたことがなかったのに。主の意志ゆえに、王は庵を出ていくときに死んだ蛇を見つけ、自分を冷たくあしらったこの聖者に死んだ蛇の首飾りをかけ、おまえも冷たい仕打ちをうけるのだ、と考えたのでした。凡人ならあたりまえにすることでしょうが、マハーラージャ・パリークシットのブラーフマナ聖者に対するこのような仕返しは、もちろん初めてことです。主の意志が背後で働いていたからこそ、このような事態になったのです。

### 第３１節

एष किं निभृताशेषकरणो मीलितेक्षणः ।
मृषासमाधिराहोस्वित्किं नु स्यात्क्षत्रबन्धुभिः ॥ ३१ ॥

*eṣa kiṁ nibhṛtāśeṣa-*
*karaṇo mīlitekṣaṇaḥ*
*mṛṣā-samādhir āhosvit*
*kiṁ nu syāt kṣatra-bandhubhiḥ*

*eṣaḥ*—これ; *kim*—〜かどうか; *nibhṛta-aśeṣa*—瞑想の雰囲気; *karaṇaḥ*—感覚; *mīlita*—閉じて; *īkṣaṇaḥ*—目; *mṛṣā*—偽の; *samādhiḥ*—法悦境; *āho*—留まる; *svit*—もしそうであれば; *kim*—どちらか; *nu*—しかし; *syāt*—おそらく; *kṣatra-bandhubhiḥ*—身分の低いクシャトリヤによって。

王は、宮殿にもどる道すがら、きょうのできごとに思いめぐらしていた。はたしてあの聖者は、目を閉じて感覚を集中させ、ほんとうに深い瞑想に入っていたのだろうか、もしや、自分より身分の低いクシャトリヤである私を迎えるのを避けようと、法悦境に入っているふりをしていたのではないだろうか、と。

**要旨解説**

パリークシット王は主の献愛者でしたから、自分があのような行為におよんだことに納得がいかず、聖者がほんとうにトランス状態にあったのかどうか、あるいは、国王という自分よりも身分の低いクシャトリヤを迎えたくなかったものだから、そのふりをしていたのではないか、と考えました。心優しい人が悪いことをすると、すぐにその心に後悔の念がわきおこります。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラとシュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、パリークシット王の行為は過去の過ちがもたらしたものとは思っていません。かれをふるさとへ、神のもとに呼びもどすためのはからいだったのですから。

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーは、これこそ主の意志でたてられた計画であり、その意志ゆえに、失望の状況が整えられたと解釈しています。見た目にはまちがったことをした王が、カリに影響された未経験のブラーフマナの少年に呪われ、こうして暖かい家庭から永遠に去っていく計画だったのです。かれのシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとの関係が、主の書物としての化身でもある偉大なる『シュリーマド・バーガヴァタム』の出現を可能にしました。主の書物としてのこの化身が、ヴラジャブーミの崇高な牛飼いの乙女たちとのラーサ・リーラという超越的な娯楽に私たちを惹きつけてくれる情報を提供してくれます。主が繰りひろげたこの神々しい娯楽には特別の重要性があります。なぜなら、主のこの娯楽を正しく学んだ人は俗な性欲をきっぱりと捨て、主への崇高な献愛奉仕の道を進んでいくからです。純粋な献愛者が失意の底に落とされるのは、さらに高い超越的な境地に高められることでもあります。従兄弟たちの奸策をとおしてアルジュナとパーンダヴァ兄弟を失望させ、クルクシェートラの戦いのきっかけを作ったのはほかならぬ主です。『バガヴァッド・ギーター』という主の音の権化を化身させるためだったのです。同じように、パリークシット王がこのようなきびしい状況におちいるという舞台が作られたことで、『シュリーマド・バーガヴァタム』という化身が主の意志によって示されたのでした。飢えと渇きに苦しめられたの

は見かけにすぎません。王はそれよりはるかにつらい思いを、母親の胎内で耐えています。アシュヴァッターマーが放ったブラフマーストラの灼熱の光に少しも乱されなかったのです。しかしこの苦境は、確かに王にとっては初めてのことでした。マハーラージャ・パリークシットほどの献愛者は、そのような苦しみに耐える力をそなえていますし、主の意志ゆえに、決して乱されることはありません。ですからこの一連のできごとは、主によって膳立てされた計画だったのです。

### 第３２節

तस्य पुत्रोऽतितेजस्वी विहरन् बालकोऽर्भकैः ।
राज्ञाघं प्रापितं तातं श्रुत्वा तत्रेदमब्रवीत् ॥ ३२ ॥

*tasya putro 'titejasvī*
*viharan bālako 'rbhakaiḥ*
*rājñāghaṁ prāpitaṁ tātaṁ*
*śrutvā tatredam abravīt*

*tasya*—彼の（聖者の）; *putraḥ*—息子; *ati*—極度に; *tejasvī*—力強い; *viharan*—遊んでいる間; *bālakaḥ*—少年達と; *arbhakaiḥ*—幼稚な者たちばかりの; *rājñā*—王によって; *agham*—苦しみ; *prāpitam*—持たせた; *tātam*—父親; *śrutvā*—聞くことで; *tatra*—すぐに; *idam*—これ; *abravīt*—話した。

その聖者には一人の息子がおり、ブラーフマナの子ゆえの驚異的な力をそなえていた。そして、未熟なほかの子どもたちと遊んでいたとき、自分の父が王によって引きおこされた問題で苦しんでいることを聞き知った。そしてすぐさま、次のように語った。

### 要旨解説

マハーラージャ・パリークシットが巧みに国を統治していたからこそ、幼い少年たちと遊んでいる未熟な少年でさえ、資格あるブラーフマナに匹敵するほどの力をそなえることができました。その少年の名をシュリンギ（Śṛṅgi）といい、その若さでも、ブラーフマナほどの力をそなえらえるようブラフマチャリャのときから父親から優れた訓練を受けることができました。しかしカリ時代は、４つの生活階級という文化的財産を腐敗させる機会をねらっていたため、この未熟な少年は、カリ時代がヴェーダ文化的世界に入る機会を与えてしまったのです。低い

生活階級を嫌う心は、カリに影響されたこのブラーフマナの少年から始まり、こうして文化的生活は日ごとに衰弱していきました。ブラーフマナによる不正行為で最初に犠牲になったのがマハーラージャ・パリークシットであり、こうして、カリの攻撃に対抗する王の保護の力は弱体化していったのです。

**第３３節**

अहो अधर्मः पालानां पीवनां बलिभुजामिव ।
स्वामिन्यघं यद् दासानां द्वारपानां शुनामिव ॥ ३३ ॥

*aho adharmaḥ pālānāṁ*
*pīvnāṁ bali-bhujām iva*
*svāminy aghaṁ yad dāsānāṁ*
*dvāra-pānāṁ śunām iva*

*aho*—～を見よ; *adharmaḥ*—無宗教; *pālānām*—支配者達の; *pīvnām*—育てられた者; *bali-bhujām*—カラスのように; *iva*—～のように; *svāmini*—主人に向かって; *agham*—罪; *yat*—～であるもの; *dāsānām*—召使いの; *dvāra-pānām*—扉を見つづけている; *śunām*—犬の; *iva*—～のように。

（ブラーフマナの子、シュリンギが言った）「国を治めるあの男がしでかした罪を、よく見るがいい。カラスか、あるいは扉のまえに立っている番犬のように、国を治める下僕の決まりに反し、自分たちの主人にはむかう罪を犯したのだ」

**要旨解説**

ブラーフマナは社会という体の頭部あるいは頭脳、クシャトリヤは腕と考えられています。腕は、体が傷つけられないよう守る役目がありますが、その腕は、頭部と頭脳の指示に従って動かなくてはなりません。それが、至高の命令が定めたあり方です。『バガヴァッド・ギーター』でも、４つの社会体制・階級、すなわちブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラは、各人の気質と仕事に応じて定められている、と確証されているからです。ブラーフマナの子どもに生まれれば、すぐれた質をそなえた父親に導かれてブラーフマナになれるチャンスが用意されており、それはまた、医者の子どもがやはりすぐれた医者の父に導かれて充分に質をそなえた医者になる機会に恵まれているのと同じです。このように、カースト体制はき

わめて科学的に作られているのです。子どもは父親の気質を受け継がなくてはなりませんし、そうすれば、別の職務ではなく、ブラーフマナや医者になることができます。資質がともなわなければブラーフマナにも医者にもなれないのは、すべての経典や社会階級が定めるとおりです。ここに登場するシュリンギは、偉大なブラーフマナのすぐれた息子として、誕生と訓練をとおしてブラーフマナの力を得ることができたのですが、正しい教養を身につけておらず、未熟な少年にすぎませんでした。カリに影響されたこのブラーフマナの息子はブラーフマナの力のために思いあがり、マハーラージャ・パリークシットをカラスや番犬と比べるというまちがいを犯してしまいました。確かに、保護と防御のために国境に目を光らせているのですから、ある意味では、王を番犬と呼ぶことはできましょう。しかし、かれを番犬呼ばわりするのは、やはりじっさいに正しい訓練を受けていない少年の証拠と言えます。このようにして、ブラーフマナの力は、かれらが正しい訓練を受けずに生得権だけを重視するようになって転落しはじめたのです。ブラーフマナ階級の転落は、カリ時代から始まっています。そして、ブラーフマナは社会階級の頭部にあたりますから、その部分が劣化したことで、社会のほかの階級も質が落ちていきました。ブラーフマナ文化のこの劣化の始まりは、これからはっきりしていくように、シュリンギの父によって大いに悔やまれることになります。

**第３４節**

ब्राह्मणैः क्षत्रबन्धुर्हि गृहपालो निरूपितः ।
स कथं तद्गृहे द्वाःस्थः सभाण्डं भोक्तुमर्हति ॥ ३४ ॥

*brāhmaṇaiḥ kṣatra-bandhur hi*
*gṛha-pālo nirūpitaḥ*
*sa kathaṁ tad-gṛhe dvāḥ-sthaḥ*
*sabhāṇḍaṁ bhoktum arhati*

*brāhmaṇaiḥ*—ブラーフマナ階級によって; *kṣatra-bandhuḥ*—クシャトリヤの子供達; *hi*—確かに; *gṛha-pālaḥ*—番犬; *nirūpitaḥ*—呼ばれて; *saḥ*—彼; *katham*—どのような理由で; *tat-gṛhe*—彼（主人）の家の中で; *dvāḥ-sthaḥ*—入り口に置いている; *sa-bhāṇḍam*—同じ容器で; *bhoktum*—食べること; *arhati*—〜にふさわしい。

王族の子孫など、番犬と呼ばれるにしかるべきもの。そして入り口に座らせておくべきものだ。そのような犬が、どういう了見で家のなかにはいりこみ、主人と同じ容器で食事をしたいなどと言えるのか。

## 要旨解説

未熟なこの少年は、王が父に水を乞うたことも、そして父が答えなかったことをも知っていたはずです。そして無教養の少年らしい生意気な態度で、父が冷たく客人をあしらったことを正しかったものと弁明しています。王が丁重に迎えられなかったことを気の毒とはさらさら思っていません。それどころか、カリ・ユガのブラーフマナにありがちのまちがった言い分で正当化しようとしています。王を番犬と比べ、王がブラーフマナの家にあがりこみ、同じ容器で水を乞うなどもってのほか、というわけです。さらに、犬は主人に養われているとしても、だからといって主人と同じ容器で食べたり飲んだりできるわけがない、と言っています。このようなまちがった名声の思いこそが、完璧な社会階級が衰退してしまう元凶であり、この節からわかるように、それはブラーフマナの未熟な子どもに端を発しています。犬は部屋や家庭に入ることは許されないように、シュリンギの言い分では、王はシャミーカ・リシの家に入る権利はありませんでした。そして、まちがっていたのは自分の父ではなく王のほうだと言い、こうして無言でいた父の立場を正当化しています。

## 第３５節

कृष्णे गते भगवति शास्तर्युत्पथगामिनाम् ।
तद्भिन्नसेतूनद्याहं शास्मि पश्यत मे बलम् ॥ ३५ ॥

*kṛṣṇe gate bhagavati*
*śāstary utpatha-gāminām*
*tad bhinna-setūn adyāhaṁ*
*śāsmi paśyata me balam*

*kṛṣṇe*—主クリシュナ; *gate*—この世界から離れて; *bhagavati*—人格主神; *śāstari*—至上の統治者; *utpatha-gāminām*—成り上がり者の; *tat bhinna*—離れたことで; *setūn*—保護者; *adya*—今日; *aham*—私自身; *śāsmi*—処罰しよう; *paśyata*—見よ; *me*—my; *balam*—力。

万民の至上の統治者、またわれわれを守る方である主シュリー・クリシュナ、人格主神がこの世界から去っていったあと、このような成り上がり者たちがのさばるようになった。だからいまこそ、私がその問題をひきつぎ、かれらを処罰してみせよう。私の力をよく見るのだ。

## 要旨解説

たいしたブラーフマナ・テージャもないのに慢心している未熟なブラーフマナは、カリ・ユガの魔力にあやつられます。先に説明されたように、マハーラージャ・パリークシットはカリに４つの場所に住む許可を与えましたが、巧みに政治を行なっていたため、カリは、割り与えられた場所をほとんど見つけることができませんでした。そのため自分の権威をなんとか確立させようとその機会をうかがっていたのですが、主の恩寵もあって、この思いあがった、しかも未熟なブラーフマナの子供を見つけました。この小さなブラーフマナは、自分の破壊する力を見せびらかすつもりでしたが、マハーラージャ・パリークシットのような偉大な国王を処罰するという厚かましい行動に出ました。主が地球を去っていったあと、そのあとに自分が収まるつもりだったのです。これらが、カリ時代に影響され、シュリー・クリシュナの代わりになりたがっている成り上がり者に一番見られる兆候です。たいした力もないのに、主の化身になりたがっている輩なのです。主クリシュナが去っていったあと、世界各地に偽物化身がたくさん現われ、偽の名声を維持するために、大衆が持つ精神的従順さを利用し、無知なかれらをまちがって導いています。つまりカリの権化は、このブラーフマナの子、シュリンギをとおして世界に君臨する機会を得た、ということです。

## 第３６節

इत्युक्त्वा रोषताम्राक्षो वयस्यानृषिबालकः ।
कौशिक्याप उपस्पृश्य वाग्वज्रं विससर्ज ह ॥ ३६ ॥

*ity uktvā roṣa-tāmrākṣo*
*vayasyān ṛṣi-bālakaḥ*
*kauśiky-āpa upaspṛśya*
*vāg-vajraṁ visasarja ha*

*iti*—このように; *uktvā*—言っている; *roṣa-tāmra-akṣaḥ*—怒りのためにまっ赤になっている目で; *vayasyān*—遊び仲間達に; *ṛṣi-bālakaḥ*—リシの息子; *kauśikī*—カウシカ川; *āpaḥ*—水; *upaspṛśya*—触れることで; *vāk*—言葉; *vajram*—雷; *visasarja*—投げた; *ha*—過去に。

リシの息子の目は怒りのためにまっ赤になり、カウシカ川の水に触れ、遊び友だちのまえで次のような雷鳴にも似た言葉を放った。

### 要旨解説

マハーラージャ・パリークシットが呪われた状況は子どもじみていた、としか言いようがありません。この節からそのことがわかります。シュリンギは、無邪気な遊び友だちにむかって、自分の傲慢さを誇示していました。正気な人なら、全人類社会に害をおよぼすかれをを制止したはずです。マハーラージャ・パリークシットのような王を、ただブラーフマナの力をひけらかすためだけに殺すことで、このブラーフマナの未熟な息子は大きなまちがいを犯してしまったのでした。

### 第３７節

इति लङ्घितमर्यादं तक्षकः सप्तमेऽहनि ।
दंक्ष्यति स्म कुलाङ्गारं चोदितो मे ततद्रुहम् ॥ ३७ ॥

*iti laṅghita-maryādaṁ*
*takṣakaḥ saptame 'hani*
*daṅkṣyati sma kulāṅgāraṁ*
*codito me tata-druham*

*iti*—このように; *laṅghita*—卓越した; *maryādam*—礼儀; *takṣakaḥ*—蛇鳥; *saptame*—７番目に; *ahani*—日; *daṅkṣyati*—噛むだろう; *sma*—確かに; *kula-aṅgāram*—王家の卑劣な者; *coditaḥ*—〜をして; *me*—私の; *tata-druham*—父親に対する敵意。

ブラーフマナの子が王をつぎのように呪った。「あの王家の最悪の男（マハーラージャ・パリークシット）は、私の父を冒涜して礼儀作法をやぶったため、きょうから７日後、蛇鳥に噛まれることだろう」

### 要旨解説

これが、ブラーフマナの力を誤用した始まりであり、やがてカリ時代のブラーフマナたちはブラーフマナの力と文化を失っていくことになります。このブラーフマナの少年は、マハーラージャ・パリークシットをクランガーラ（*kulāṅgāra*）「王家の卑劣な者」と考えたのですが、じつは、少年こそそう呼ばれてしかるべき人間でした。まるで、牙の折れた蛇のようにブラーフマナ階級の力が失われたことになった張本人だったからです。蛇は毒牙があれば恐ろしい生

き物ですが、毒がなければ子どもに怖がられるだけ。カリの権化はまずブラーフマナの少年をえじきにし、そして徐々にほかの階級が影響されていきました。こうして今では、社会階級という科学的システム全体が腐敗しきったカースト制度になり、同じようにカリ時代に影響を受けたほかの階級によって根こそぎにされようとしています。よく見るべき点はこの腐敗の元凶であり、この制度の科学的価値の知識を知らずに、制度そのものを非難すべきではありません。

### 第３８節

ततोऽभ्येत्याश्रमं बालो गले सर्पकलेवरम् ।
पितरं वीक्ष्य दुःखार्तो मुक्तकण्ठो रुरोद ह ॥ ३८ ॥

*tato 'bhyetyāśramaṁ bālo*
*gale sarpa-kalevaram*
*pitaraṁ vīkṣya duḥkhārto*
*mukta-kaṇṭho ruroda ha*

*tataḥ*—そのあと; *abhyetya*—～の中に入ったあと; *āśramam*—その庵; *bālaḥ*—少年; *gale sarpa*—肩の上の蛇; *kalevaram*—体; *pitaram*—父親に; *vīkṣya*—見ている; *duḥkha-ārtaḥ*—in a sorry plight; *mukta-kaṇṭhaḥ*—loudly; *ruroda*—cried; *ha*—in the past.

そのあと、庵にもどって父親の肩にかかっている蛇を見ると、悲しみにかられて大声で泣きだした。

### 要旨解説

少年は不安にかられていました。とんでもない過ちをしてかしたのですから。だから、泣いてその重荷から解放されようとしたのです。そして庵に入り、父親のそのありさまを見ると、大声で泣けば救われると思いました。しかし、とりかえしはつきません。父親はこの一連のできごとを嘆き悲しむばかりでした。

### 第３９節

स वा आरिरसो ब्रह्मन् श्रुत्वा सुतविलापनम् ।
उन्मील्य शनकैर्नेत्रे दृष्ट्वा चांसे मृतोरगम् ॥ ३९ ॥

*sa vā āṅgiraso brahman*
*śrutvā suta-vilāpanam*
*unmīlya śanakair netre*
*dṛṣṭvā cāṁse mṛtoragam*

*saḥ*—彼; *vai*—もまた; *āṅgirasaḥ*—アンギラーの家系に生まれたそのリシ; *brahman*—おおシャウナカよ; *śrutvā*—聞いて; *suta*—彼の息子; *vilāpanam*—悲しんで泣いている; *unmīlya*—開けている; *śanakaiḥ*—徐々に; *netre*—目によって; *dṛṣṭvā*—見ることで; *ca*—もまた; *aṁse*—肩に; *mṛta*—死んだ; *uragam*—蛇。

ブラーフマナたちよ。アンギラー・ムニの家系に生まれたそのリシは、我が子の鳴き声を聞くと、ゆっくりと目をあけ、自分の首に蛇の屍がかけられているのに気づいた。

**第４０節**

विसृज्य तं च पप्रच्छ वत्स कस्माद्धि रोदिषि ।
केन वा तेऽपकृतमित्युक्तः स न्यवेदयत् ॥ ४० ॥

*visṛjya taṁ ca papraccha*
*vatsa kasmād dhi rodiṣi*
*kena vā te 'pakṛtam*
*ity uktaḥ sa nyavedayat*

*visṛjya*—横に投げている; *tam*—それ; *ca*—もまた; *papraccha*—尋ねた; *vatsa*—息子よ; *kasmāt*—なんのために; *hi*—確かに; *rodiṣi*—泣いている; *kena*—だれかによって; *vā*—そうでなければ; *te*—彼ら; *apakṛtam*—間違った行ない; *iti*—そのように; *uktaḥ*—尋ねられて; *saḥ*—その少年; *nyavedayat*—すべてを知らせた。

リシはその屍を横に投げたあと、どうして泣いているのだ、だれかがおまえを傷つけたのか、と尋ねた。息子はそれを聞き、ことの一部始終を話した。

**要旨解説**

父は、首にかかっていた蛇を見ても、さわぎもしませんでした。ただつまみあげてぽいと捨

てにすぎません。じっさい、マハーラージャ・パリークシットがしたことに重大な過失があったわけではなかったのですが、ばかな息子は大げさに受けとり、カリに影響されていたために王を呪い、そしてこれまでの楽しかった暮らしに幕が降りたのです。

### 第４１節

निशम्य शप्तमतदर्हं नरेन्द्रं
　　स ब्राह्मणो नात्मजमभ्यनन्दत् ।
अहो बतांहो महदद्य ते कृत-
　　मल्पीयसि द्रोह उरुर्दमो धृतः ॥ ४१ ॥

*niśamya śaptam atad-arhaṁ narendraṁ*
　　*sa brāhmaṇo nātmajam abhyanandat*
*aho batāṁho mahad adya te kṛtam*
　　*alpīyasi droha urur damo dhṛtaḥ*

*niśamya*—聞いたあと; *śaptam*—呪った; *atat-arham*—決して非難されるべきではない; *nara-indram*—人類の最善者、王に; *saḥ*—それ; *brāhmaṇaḥ*—ブラーフマナ・リシ; *na*—〜ではない; *ātma-jam*—彼自身の子; *abhyanandat*—祝った; *aho*—ああ; *bata*—嘆かわしい; *aṁhaḥ*—罪; *mahat*—大きな; *adya*—今日; *te*—あなた自身; *kṛtam*—行なった; *alpīyasi*—取るにたらないこと; *drohe*—冒涜; *uruḥ*—非常に大きい; *damaḥ*—処罰; *dhṛtaḥ*—与えた。

父は、王が呪われたことを我が子の口から聞いた。相手は、全人類のなかでもっとも優れ、決して咎められるような人物ではなかったのに。リシは息子を褒めるどころか、繰りかえし言うのだった。「ああ、なんという罪なことをしてしまったのか！　ささいな冒涜に重大な罰を科してしまったのだ」

### 要旨解説

王は人類の頂点に立つ人物です。神の代表者ですから、なにをしても咎められません。言いかえれば、王は過ちを犯さない、ということです。王はブラーフマナの息子であっても、罪を犯したのであれば絞首刑さえ言いわたしますが、ブラーフマナを殺す反動の罪をかぶることはありません。王側にどこか誤りがあっても、非難されません。医者が医療ミスで患者の命を絶つことになっても、死刑を科されることはありません。ならば、マハーラージャ・パリークシ

ットほどの優れた敬虔な王なら言うまでもありません。ヴェーダの慣習では、王は、王として国を治める立場にいても、ラージャルシ（*rājarṣi*）・偉大な聖人になる訓練を受けています。市民が平和に、そして恐れることなく暮らせるのは、国王の優れた政府があってこそ。ラージャルシは国を巧みに、そして敬虔に治めるため、市民はかれを主と同じほどに尊びます。それがヴェーダの教えでもあります。王をナレーンドラ（*narendra*）、人類のなかでも最善の者、と呼びます。ならば、マハーラージャ・パリークシットほどの国王が、ブラーフマナの力をそなえていても未熟で、そして思いあがったこのブラーフマナの子に非難されることがあっていいものでしょうか。

シャミーカ・リシは充分な経験を積んだ、そして優れたブラーフマナですから、過ちを犯した我が子をかばうことはしませんでした。その愚かな行為をただ嘆くばかり。王は一般的な規則の制限を受けませんから、マハーラージャ・パリークシットのような優れた王にそのような規則があてはまらないのは当然です。王の過ちは取るにたらないものでしたから、死ぬ呪いを受けてしまったのは、呪いをかけたシュリンギの大罪です。だからこそリシ・シャミーカは、この一連の出来事を嘆き悲しんでいるのです。

**第４２節**

न वै नृभिर्नरदेवं पराख्यं
सम्मातुमर्हस्यविपक्वबुद्धे ।
यत्तेजसा दुर्विषहेण गुप्ता
विन्दन्ति भद्राण्यकुतोभयाः प्रजाः ॥ ४२ ॥

*na vai nṛbhir nara-devaṁ parākhyaṁ*
*sammātum arhasy avipakva-buddhe*
*yat-tejasā durviṣaheṇa guptā*
*vindanti bhadrāṇy akutobhayāḥ prajāḥ*

*na*—決して～ない; *vai*—実際のところ; *nṛbhiḥ*—誰ににによっても; *nara-devam*—人間の神に; *para-ākhyam*—超越的な者; *sammātum*—同じ立場に置く; *arhasi*—その力によって; *avipakva*—熟していない、あるいは未熟な; *buddhe*—知性; *yat*—～である者の; *tejasā*—その力によって; *durviṣaheṇa*—乗りこえられない; *guptāḥ*—守られて; *vindanti*—楽しむ; *bhadrāṇi*—すべての繁栄; *akutaḥ-bhayāḥ*—完全に守られて; *prajāḥ*—the subjects.

我が子よ。おまえの知性は未熟であり、人類のなかでもっとも優れた人間でもある王が人格主神と同じ立場にいることを知らない。決して凡人と同じ位置にいるとは考えてはならない。国の民が豊かに暮らせるのは、だれも超えられない王の力に守られているからこそ。

**第４３節**

अलक्ष्यमाणे नरदेवनाम्नि
रथाङ्गपाणावयमङ्ग लोकः ।
तदा हि चौरप्रचुरो विनंक्ष्य-
त्यरक्ष्यमाणोऽविवरूथवत् क्षणात् ॥ ४३ ॥

*alakṣyamāṇe nara-deva-nāmni*
*rathāṅga-pāṇāv ayam aṅga lokaḥ*
*tadā hi caura-pracuro vinaṅkṣyaty*
*arakṣyamāṇo 'vivarūthavat kṣaṇāt*

*alakṣyamāṇe*—廃止されて; *nara-deva*—君主の; *nāmni*—その名前の; *ratha-aṅga-pāṇau*—主の代表者; *ayam*—この; *aṅga*—我が子よ; *lokaḥ*—この世界; *tadā hi*—すぐに; *caura*—泥棒達; *pracuraḥ*—過度の; *vinaṅkṣyati*—征服する; *arakṣyamāṇaḥ*—守られていない; *avivarūtha-vat*—子羊のように; *kṣaṇāt*—すぐに。

我が子よ。戦闘馬車の輪を手にもつ主は君主政権をとおして表わされるが、その政権が廃止されれば、世界には盗賊がはびこるようになる。そうなれば、その輩たちはすぐさま、だれにも守られていない、あたかもちりぢりになった子羊のような市民たちにおそいかかるのだ。

**要旨解説**

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、君主政権は至高主・人格主神を表わしている、と言います。王は絶対人格主神の代表者とされていますが、それはすべての生命体を守るために神と同じ質をそなえる訓練を受けているからです。クルクシェートラの戦いは、主の真の代表者、すなわちマハーラージャ・ユディシュティラを王座に就かせるために計画されました。理想的な王は、完璧な王を作りだす士気にささえられた文化と献愛奉仕で徹底的な訓練を受けています。そのような君主は、なんの訓練も受けていない無責任ないわゆる民主主義の政治家よりははるかに素晴らしい。現代の民主主義に住みつく盗賊や悪漢は、偽りの意思表示でしかない選

挙に頼り、まんまと成功した悪漢や盗賊たちが大衆を食いものにします。訓練を受けた一人の君主は、無能の悪大臣たちよりもはるかに優れており、この節でも、マハーラージャ・パリークシットのような君主政権が破棄されてしまえば、大衆はカリ時代から無数の攻撃にさらされるようになる、と暗示されています。人々は、口先だけの民主主義体制ではぜったいに幸福になれません。国王不在のそのような管理体制について、次の節で説明されています。

**第４４節**

तदद्य नः पापमुपैत्यनन्वयं
यन्नष्टनाथस्य वसोर्विलुम्पकात् ।
परस्परं घ्नन्ति शपन्ति वृञ्जते
पशून् स्त्रियोऽर्थान् पुरुदस्यवो जनाः ॥ ४४ ॥

*tad adya naḥ pāpam upaity ananvayaṁ*
*yan naṣṭa-nāthasya vasor vilumpakāt*
*parasparaṁ ghnanti śapanti vṛñjate*
*paśūn striyo 'rthān puru-dasyavo janāḥ*

*tat*—この理由で; *adya*—この日から; *naḥ*—私達に; *pāpam*—罪の反動; *upaiti*—襲いかかるだろう; *ananvayam*—混乱; *yat*—なぜなら; *naṣṭa*—廃棄されて; *nāthasya*—君主の; *vasoḥ*—富の; *vilumpakāt*—略奪されて; *parasparam*—互いの間で; *ghnanti*—殺すだろう; *śapanti*—傷つけるだろう; *vṛñjate*—盗むだろう; *paśūn*—動物; *striyaḥ*—女性; *arthān*—富; *puru*—非常に; *dasyavaḥ*—泥棒達; *janāḥ*—大衆。

君主政権が終わり、悪漢や盗賊たちが人々の富を略奪しはじめ、社会は大混乱におちいる。人々は殺されるか傷つけられ、動物や女性たちがさらわれる。このような大罪すべての責任を私たちが責任を負うことになるのだ。

**要旨解説**

この節の*naḥ*（ナハ）「私たち」にはひじょうに重要な意味があります。聖者は、自分たちブラーフマナが君主政府を殺害する集団となり、その責任を明確に言及しており、こうして、国の臣民の富を略奪する者でしかないいわゆる民主主義者がのさばる機会を与えています。民主主義者たちは、市民が裕福に暮らせるよう働くこともなく、管理組織にしがみついています。

個人の満足のためにその地位にのさばり、こうして一人の王ではなく、無数の無責任な王が市民から税金を集めて巨大化しているのです。この節では、優れた君主政府が失われた結果、だれもが富、動物、女性などを略奪するようになり、互いに混乱を作りだしている、と予言されています。

### 第４５節

तदार्यधर्मः प्रविलीयते नृणां
वर्णाश्रमाचारयुतस्त्रयीमयः ।
ततोऽर्थकामाभिनिवेशितात्मनां
शुनां कपीनामिव वर्णसङ्करः ॥ ४५ ॥

*tadārya-dharmaḥ pravilīyate nṛṇāṁ*
*varṇāśramācāra-yutas trayīmayaḥ*
*tato 'rtha-kāmābhiniveśitātmanāṁ*
*śunāṁ kapīnām iva varṇa-saṅkaraḥ*

*tadā*—その時; *ārya*—進歩的な文化; *dharmaḥ*—活動; *pravilīyate*—系統的に征服される; *nṛṇām*—人類の; *varṇa*—身分; *āśrama*—社会の階級; *ācāra-yutaḥ*—優れた作法で構成されて; *trayī-mayaḥ*—ヴェーダの教えに関連して; *tataḥ*—その後; *artha*—経済発展; *kāma-abhiniveśita*—感覚満足に完全に没頭して; *ātmanām*—人間の; *śunām*—犬のように; *kapīnām*—猿のように; *iva*—そのように; *varṇa-saṅkaraḥ*—不必要な人間。

そのとき一般大衆は、社会の地位・階級とヴェーダの教えから、また人の質にもとづく活動に関連した発展的文化の道からしだに逸脱していく。やがてかれらは、感覚を満たしてくれる経済発展に対する魅力を高め、その結果、犬や猿と同じ程度の望ましくない人間が増えていく。

### 要旨解説

この節では、君主政権が消失することで、一般大衆は犬や猿のような望ましくない人間に落ちぶれていくと予言されています。猿がいつでもセックスのことだけを考え、犬がところかまわず性行為をするように、不正な交わりの結果として誕生した大衆は、ヴェーダが定める優れた作法に従う生き方、社会の身分や階級にある優れた活動から系統的に逸脱していきます。

ヴェーダがしめす生活は、アーリャン（Āryan）文化にもとづく進歩的な生き方です。アー

リャンはヴェーダ文化に積極的に従う人々です。ヴェーダ文化は、神のもとに、ふるさとに帰っていけるよう私たちを導いており、その世界には誕生も死も、老年も病気もありません。物質界の暗闇にいつまでもいてはいけない、物質界をはるかに超えた精神的王国の光を目ざさなくてはならない――とヴェーダは私たちすべてを導いています。人の気質にもとづくカースト制度や生活階級は、主によって、あるいは主の代表者や偉大なリシたちによって科学的に計画されています。完璧な人生の道には、物質・精神どちらの教えもすべて用意されています。ヴェーダの教えに従う生き方は、人が猿や犬のような生き方をするのは許しません。感覚満足と経済発展に根ざした堕落した文化は、無神論の、あるいは「人民の、人民による、人民のための政治」と謳った王を除いた政府から作りだされたものです。ですから、人々が自分たちの手で選んだ貧弱な行政を非難するのは筋違いというものです。

**第４６節**

धर्मपालो नरपतिः स तु सम्राड् बृहच्छ्रवाः ।
साक्षान्महाभागवतो राजर्षिर्हयमेधयाट् ।
क्षुत्तृट्श्रमयुतो दीनो नैवास्मच्छापमर्हति ॥ ४६ ॥

*dharma-pālo nara-patiḥ*
*sa tu samrāḍ bṛhac-chravāḥ*
*sākṣān mahā-bhāgavato*
*rājarṣir haya-medhayāṭ*
*kṣut-tṛṭ-śrama-yuto dīno*
*naivāsmac chāpam arhati*

*dharma-pālaḥ*—宗教の保護者; *nara-patiḥ*—その王; *saḥ*—彼; *tu*—しかし; *samrāṭ*—皇帝; *bṛhat*—非常に; *śravāḥ*—名高い; *sākṣāt*—直接; *mahā-bhāgavataḥ*—主の一流の献愛者; *rāja-ṛṣiḥ*—王族の中の聖者; *haya-medhayāṭ*—馬の供儀祭の偉大な執行者; *kṣut*—飢え; *tṛṭ*—渇き; *śrama-yutaḥ*—疲労困憊; *dīnaḥ*—襲われて; *na*—決して～ない; *eva*—こうして; *asmat*—私達によって; *śāpam*—呪う; *arhati*—～に値する。

パリークシット皇帝はじつに信心深い王である。名高く、人格主神に仕える一流の献愛者でもある。王族のなかの聖者であり、馬の供儀祭を幾度となく執行した。そのような王が飢えと渇きのために疲労困憊におちいっても、決して呪われることがあってはならない。

## 要旨解説

シャミーカ聖者は、王族のための一般的な法典について説明し、王は過ちを犯さないために決して非難の対象にはならないことを力説したあと、パリークシット王についてとくに話したいことがありました。マハーラージャ・パリークシットの特別の気質は、この節に要約されています。パリークシット王は、王としての地位だけをとっても、王族階級の宗教原則を治める支配者として広く世に知られていた人物でした。シャーストラには、社会の地位や階級に応じた義務がすべて定められています。そしてパリークシット皇帝には、『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第43節）で述べられているクシャトリヤの特質がすべてそなわっていました。主の偉大な献愛者、そして自己を悟った魂でもあります。そのような王を呪うことは、たとえかれが疲労困憊の状態にあったとしても、あってはならないことでした。こうしてシャミーカ・リシは、マハーラージャ・パリークシットが呪われたことは、あらゆる角度から見ても不当なことだった、と認めました。ほかのブラーフマナたちはこの出来事とはなんの関係もないのですが、少年のブラーフマナが犯した子どもじみた行為のために、全世界の状況が一変してしまいました。こうして、ブラーフマナのリシ・シャミーカは、世界の優れた階級が堕落してしまったその責任を引きうけようとしているのです。

### 第４７節

अपापेषु स्वभृत्येषु बालेनापक्वबुद्धिना ।
पापं कृतं तद्भगवान् सर्वात्मा क्षन्तुमर्हति ॥ ४७ ॥

*apāpeṣu sva-bhṛtyeṣu*
*bālenāpakva-buddhinā*
*pāpaṁ kṛtaṁ tad bhagavān*
*sarvātmā kṣantum arhati*

*apāpeṣu*—すべての罪から自由な者に; *sva-bhṛtyeṣu*—従属し、守られるべき立場にある者に; *bālena*—子どもによって; *apakva*—未熟な者; *buddhinā*—知性によって; *pāpam*—罪な行為; *kṛtam*—してしまった; *tat bhagavān*—ゆえに人格主神; *sarva-ātmā*—遍在する者; *kṣantum*—許しを乞うた; *arhati*—〜にふさわしい。

そしてリシは遍在する人格主神に祈り、未熟で知性のない我が子の許しを乞うた。その子は、

罪など犯していない、そして自分たちよりも低い身分の、守られるべき立場にいる人物を呪うというとりかえしのつかない大きな過ちを犯してしまったのである。

**要旨解説**

だれであろうと、自分の行為の責任は、敬虔なことであろうと罪なことであろうと、自分で負うものです。リシ・シャミーカは、我が子がマハーラージャ・パリークシットを呪うという大罪を犯してしまったことを見抜きました。敬虔な統治者で、そして主の一流の献愛者だからこそあらゆる罪とは無縁で、ブラーフマナに守られるべき立場にある人物だったのに。主の献愛者を冒涜してしまうと、その反動から逃れるのは至難の業です。ブラーフマナは社会階級の頂点にいることから、自分たちに従う人々を守るべき立場にあり、呪うなどもってのほかです。ブラーフマナが下の位にいるクシャトリヤやヴァイシャたちをきびしく呪う出来事はときに起こりますが、マハーラージャ・パリークシットの場合は、これまで説明されてきたように、呪われるようなことはなにもしていませんでした。ばかな少年が、自分はブラーフマナの子だという愚かな虚栄心ゆえにしでかしたことであり、こうしてかれは神の法則で処罰されるはめになるのです。主は、純粋な献愛者を傷つける者を決して許しません。ですから、王を呪うことで、愚かなシュリンギは罪を犯しただけではなく、とりかえしのつかない冒涜を犯してしまったのです。ですからリシは、罪を犯してしまった我が子を救えるのは最高人格主神しかいないことも知っていました。だからこそ、とりかえしのつかないことさえ元にもどしてしまう至高主にじかに許しを乞いました。そしてその願いは、知性のかけらもない愚かな少年の名においてなされました。

ここで、「パリークシット・マハーラージャが苦境におちいるのは物質存在から救われるためだから、なぜブラーフマナの少年が冒涜行為の責任を負わなくてはならないのだろう」と考える人がいるかもしれません。その答として「冒涜行為はその子が一人でしたことで、かんたんに許される、だから父親の祈りは受けいれられた」と言えます。しかし「なぜブラーフマナ社会全体が、カリが世界情勢に入りこむことを許した責任を負わなくてはならないのか」という質問であれば、その答は『ヴァラーハ・プラーナ』のなかにあります。あるとき、人格主神に敵意をいだく悪魔が主に殺されず、カリ時代の利点を得るためにブラーフマナの家系に誕生することを許されました。どこまでも慈悲深い主はかれらに敬虔なブラーフマナの家庭に誕生する機会を与えました。そのことで解放の境地に向かって進んでいける配慮がなされていたのです。しかし悪魔たちはそのすばらしい機会を活かすことなく、ブラーフマナになった虚栄心のためにブラーフマナ文化をまちがって使いました。その典型的な例がシャミーカ・リシの息

子であり、この例をとおして、現代のブラーフマナの愚かな息子たちすべてに、シュリンギのような愚かなことをしないよう警告が発せられています。またかれらは、前世で持っていた悪魔的な気質に影響されないよう警告されています。もちろん、この愚かなブラーフマナの少年は主に許されはしますが、シャミーカ・リシのような父親を持たず、ブラーフマナの家系に誕生した利点をまちがって使えば、救いがたい困難におとしいれられることでしょう。

### 第４８節

तिरस्कृता विप्रलब्धाः शप्ताः क्षिप्ता हता अपि ।
नास्य तत् प्रतिकुर्वन्ति तद्भक्ताः प्रभवोऽपि हि ॥ ४८ ॥

*tiraskṛtā vipralabdhāḥ*
*śaptāḥ kṣiptā hatā api*
*nāsya tat pratikurvanti*
*tad-bhaktāḥ prabhavo 'pi hi*

*tiraḥ-kṛtāḥ*—名誉を傷つけられて; *vipralabdhāḥ*—騙されて; *śaptāḥ*—呪われて; *kṣiptāḥ*—無視されることで混乱しても; *hatāḥ*—あるいはたとえ殺されても; *api*—もまた; *na*—決して〜ない; *asya*—このような行動すべてに対して; *tat*—彼らに; *pratikurvanti*—逆らう; *tat*—主の; *bhaktāḥ*—献愛者達; *prabhavaḥ*—力強い; *api*—〜でも; *hi*—確かに。

主の献愛者は忍耐強く、たとえ名誉を傷つけられたり、騙されたり、呪われたり、妨害されたり、軽視されたり、あるいは殺されたとしても、決して復讐しようとしない。

### 要旨解説

リシ・シャミーカは、献愛者の蓮華の御足に冒涜をはたらいた者を主は許さないことも知っていました。主は、献愛者に身をゆだねよ、とだけ私たちに教えることができます。リシは、もしマハーラージャ・パリークシットが少年を呪いかえせば救われるはず、と考えました。しかしまた、純粋な献愛者は俗的な利益や逆境などをまったく問題にしないことも知っていました。だから献愛者は、名誉が傷つけられ、呪われ、無視されたりなどしてもとくに仕返しをするつもりはありません。そのようなことでは、自分の身にどのようなことが起こっても頓着しないのです。しかし、それが主や献愛者にむかって為されたときには、断固として対抗します。このできごとは個人的なものでしたから、王は対抗しないだろうとリシは考えました。ですか

ら、未熟な我が子のために主に懇願するしかなかったのです。

ブラーフマナだけが、呪いをかけたり祝福を授けたりする力をそなえているわけではありません。主の献愛者は、ブラーフマナではなくてもブラーフマナよりも力をそなえています。しかし力強い献愛者はその力を自分個人のために使うことはありません。献愛者の力はすべて、いつでも主への奉仕、あるいは主の献愛者だけに使われるのです。

### 第４９節

इति पुत्रकृताघेन सोऽनुतप्तो महामुनिः ।
स्वयं विप्रकृतो राज्ञा नैवाघं तदचिन्तयत् ॥ ४९ ॥

*iti putra-kṛtāghena*
*so 'nutapto mahā-muniḥ*
*svayaṁ viprakṛto rājñā*
*naivāghaṁ tad acintayat*

*iti*—このように; *putra*—息子; *kṛta*—〜によって為されて; *aghena*—罪によって; *saḥ*—彼（そのムニ）; *anutaptaḥ*—後悔している; *mahā-muniḥ*—その聖者; *svayam*—個人的に; *viprakṛtaḥ*—そのように侮辱されて; *rājñā*—王によって; *na*—〜ではない; *eva*—確かに; *agham*—罪; *tat*—それ; *acintayat*—〜について考えた。

こうして聖者は、我が子が犯した罪を悔やむばかりだった。王にされたことをたいした冒涜とは思ってはいなかったのである。

### 要旨解説

こうして、ことのいきさつが明らかになりました。マハーラージャ・パリークシットが死んだ蛇を聖者の首にぶらさげたことは深刻な侮辱ではなかったのですが、シュリンギの呪いは重大な冒涜でした。その恐ろしい冒涜がおろかな子ども一人で起こされたのです。ですから、罪の反動から逃れることはできなくても、至高主に許される余地は充分にありました。マハーラージャ・パリークシットにしても、おろかなブラーフマナに呪われたことをことさら気にしていたわけではありません。それどころか、この苦境を好機とし、そして主の恩寵にすがり、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの恩寵をとおして最高完成に到達することができました。じっさい、すべては主の望みから起こったことで、マハーラージャ・パリークシッ

ト、リシ・シャミーカ、そしてその子シュリンギもその望みが実現されるための道具だったのです。ですから、じつはだれも困難な状況に落とされたわけではありません。すべては至高の人物との関連のなかでおこなわれたことだったからです。

### 第５０節

प्रायशः साधवो लोके परैर्द्वन्द्वेषु योजिताः ।
न व्यथन्ति न हृष्यन्ति यत आत्माऽगुणाश्रयः ॥ ५० ॥

*prāyaśaḥ sādhavo loke*
*parair dvandveṣu yojitāḥ*
*na vyathanti na hṛṣyanti*
*yata ātmāguṇāśrayaḥ*

*prāyaśaḥ*—ふつう; *sādhavaḥ*—聖者達; *loke*—この世界で; *paraiḥ*—他の者達によって; *dvandveṣu*—二元性の中で; *yojitāḥ*—従事して; *na*—決して～ない; *vyathanti*—苦しんで; *na*—～もない; *hṛṣyanti*—喜びを感じる; *yataḥ*—なぜなら; *ātmā*—自己; *aguṇa-āśrayaḥ*—超越的。

一般的に超越主義者は、物質界の二元性のなかで行動してはいるが、苦しみ悩んでいるわけではない。（その俗なことに）喜びを感じているわけでもない。俗世を超えた活動をしているからである。

### 要旨解説

超越主義者には、経験主義哲学者、神秘主義者、主の献愛者がいます。経験主義哲学者は絶対者のなかに融合する完成、神秘主義者は遍在する至高の魂の知覚、そして主の献愛者は人格主神への超越的な愛情奉仕を目ざしています。ブラフマン、パラマートマー、バガヴァーンは、一人の超越者・至高主の異なる様相ですから、これらの超越主義者たちはすべて、物質自然界の三様式を超えた境地にいます。物質的な苦悩や幸福感は三様式が作りだしたものですから、物質的な苦しみも幸せも、超越主義者にはなんの関係もないのです。パリークシット王は献愛者で、リシは神秘主義者でした。ですから、どちらも至高の意志によって作りだされた偶発的なこの出来事に深くかかわっていたわけではありませんでした。愚かなことをしたこの子も、主の意志を満たす道具だったのです。

*これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第１編・第18章、「マハーラージャ・パリークシット、ブラーフマナの少年に呪われる」の要旨解説を終了します。*